特204
559

鏡增抄要

全

塚本哲三 編

東京
有朋堂 株式會社

始

特 204
559

鏡增抄要

塚本哲三 編

東京
有朋堂 株式會社

例言

一、本書は、師範學校第三・四學年、中學校・高等女學校第四・五學年に於ける國語科副讀本の資料たらん事を意圖して編纂したものであります。

二、本書は、增鏡の序及び本文の各篇中から、中等教科の國語教材として最も適切だと信ずる者を擇ぶと同時に、大體に於て、歴史物語としてその話の筋が續くやうに取材致しました。

三、本書の本文は、大體『重修增鏡詳解』に從ひましたが、往々にして流布の版本其の他に據つた所もあります。

目次

序……一
第一　おどろのした……五
第二　新島守……一二
第三　ふぢ衣……三二
第四　三神山……三五
第五　内野の雪……四〇
第六　烟の末々……四二
第七　おりゐる雲……四六
第八　山のもみぢ葉……四七
第九　北野の雪……四九
第十　あすか川……五二

第十一　草まくら……五四
第十二　老のなみ……五六
第十三　今日のひかげ……五八
第十四　つげの小櫛……六〇
第十五　うら千鳥……六四
第十六　秋のみ山……六六
第十七　春のわかれ……六九
第十八　むら時雨……七四
第十九　久米のさら山……八九
第二十　月草の花……一一五

要抄増鏡

塚本哲三編

序

〔一〕二月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺に詣でて、「常在靈鷲山」など、心の中に唱へて拜み奉る、傍に、八十にもや餘りぬらむと見ゆる尼一人、鳩の杖にかかりて參れり。とばかりありて、「たけく思ひ立ちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうちやすみなむ坊へ行きて御燈の事などいへ」とて、具したる若き女房の、つきづきしき程なるをば、かへしぬめり。

〔二〕「釋迦牟尼佛」と度々申して、夕日の花やかにさし入りたるを

(一)釋迦が沙羅雙樹の林間で入滅し、その林が鶴のやうに眞白になつたといふ故事
(二)法華經の偈の文句

うち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。我身の上の心地こそすれ」とて、より居たるけしき、何となくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近く寄りて、「いづくよりまうで給へるぞ。ありつる人の歸り來むほど、御伽せむはいかが」など言へば、「このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遙けき心地し侍るあはれになむ」と言ふ。「さても、いくつにかなり給ふらむ」と問へば、「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程になむ。百歳にもこよなく餘り侍りぬらむ。來し方ゆく先、例もあり難かりし世の騷にも、この御寺ばかりは恙なくおはします。なほやむごとなき如來の御光なりかし」など言ふも、古代にみやびかなり。

〔三〕 年のほどなど聞くも、珍しき心地して、かかる人こそ昔物語もすなれと思ひいでられて、まめやかに語らひつつ、「昔のことの聞かまほしきままに、年の積りたらむ人もがなと、思ひ給ふるに、

(一)ハ行下二段、卑自の動詞

嬉しきわざかな。少しのたまはせよ。おのづから古き歌など書きたるもののかたはし見るだに、その世にあへる心地するぞかし」といへば、すげみたるロうちほほゑみて、「いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りし事は、ここらの年頃に、ぬば玉の夢ばかりだになくおぼほれて、何のわきまへか侍らむ」とは言ひながら、けしうはあらず、あへなむと思へる氣色なれば、いよいよいひはやして、「かの雲林院の菩提講に參りあへりし翁の言の葉をこそ、假名の日本紀にはすめれ。又、かの世繼がうまごとか言ひしつくも髮の物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有樣のやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ」などすかせば、さは心うべかめれど、いよいよ口すげみがちにて、「そのかみは、げに人の齡も高く、膽強かりければ、それに隨ひて、魂も明かにてや、しか聞えつくしけむ。あさましき身は、いたづらなる年のみ積れるばかりにて、昨

(一)夢・夜・黑等に冠する枕詞

(二)大鏡をいふ、大鏡は山城雲林院の菩提講に落合つた翁二人嫗一人の物語のやうに出來てゐる

(三)今鏡をいふ

日今日といふばかりの事をだに、日も耳も朧になりにて侍れば、ましてい、と怪しきひが事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞ」といふ。

〔四〕いさ、只おろおろ見及びし物どもは、水鏡といふにや、神武天皇の御代より、いとあらかにしるせり。その次には大鏡、文德の古へより、後一條の御門まで侍りしにや。又、世繼(一)とか、四十帖の草子にぞ、延喜より堀河の先帝までは少しこまやかなる。又某の大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、彌世繼(二)は、隆信朝臣の、後鳥羽院の御位の御程までをしるしたりとぞ見え侍りし。その後のことなむ、いとおぼつかなくなりにける。覺え給へらむ所々までものたまへ。こよひ誰も御伽せむ。かかる人に遭ひ奉れるも、しかるべき御契あらむものぞ」など語らへば、「そのかみの事は、いみじうたどたどし

(一)榮華物語をいふ

(二)この書は亡びて今傳つてゐない

けれど、誠に事のつづきを聞えざらむも、おぼつかなかるべければ、たえだえに少しなむ。ひが事ども多からむかし。そはさし直し給へ。いとかたはらいたきわざにぞ侍るべきかな。かのふるき事どもにはなずらへ給ふまじうなむ」とて、

おろかなる心や見えむ、ます鏡、
ふるき姿にたちはおよばで。

と、わななかしいでたるも、にくからず、いと古代なり。「さらば、今のたまはむことをも、また書きしるして、かの昔の面影にひとしからむとこそはおぼすめれ」といらへて、

いまもまた、昔をかけば、ます鏡、
ふりぬる代々の跡に重ねむ。

第一　おどろのした

(一)後白河法皇
(二)後鳥羽帝

〔一〕建久三年三月十三日に、法皇(一)かくれさせ給ひにし後は、御門(二)ひとへに世をしろしめして、四方の海なみ靜に、ふく風もえだを鳴さず、世治り民やすくして、あまねき御うつくしびの浪、秋津島のほかまで流れ、しげき御惠、筑波山のかげよりも深し萬の道々にあきらけくおはしませば、國に才ある人おほく、昔に恥ぢぬ御代にぞありける中にも、敷島の道なむ、すぐれさせ給ひける御歌かずしらず人の口にある中にも、

奥山のおどろの下もふみわけて、
　みちある世ぞと人に知らせむ。

(一)土御門帝

と侍るこそ、まつりごと大事と思されける程しるく聞えて、いといみじくやむごとなくは侍れ。

〔二〕建久九年正月十一日、第一の御子、四になり給ふに御位ゆづり申させ給ひて、おり給ふ。御年十九。位におはします事十五年なりき。今日明日、二十ばかりの御齢にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御ありさまよりは、なかなかやすらかに、御幸など御心のままならむとにや。世(一)をしろしめす事は、今もかはらねば、いとめでたし。

(二)所謂院政

〔三〕鳥羽殿、白河殿なども、修理せさせ給ひて、常に渡りすませ給へど、なほ又水無瀬(一)といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばしば通ひおはしましつつ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり、世をひびかして、遊をのみぞし給ふ。所がらも遙々と、川にのぞめる眺望、いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌をあはせられしにも、とりわきてこそは、

見わたせば、山もとかすむみなせ川、
　ゆふべは秋となに思ひけむ

(一)山城乙訓郡

〔四〕茅葺の廊渡殿など、はるばると、艶にをかしうせさせ給へり

御前の山より瀧落されたる石のたたずまひ、苔深きみ山木に、枝さし交したる庭の小松も、げにげに千世をこめたる〔一〕霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して、御遊などありける後、定家の中納言、いまだ下萬なりける時に奉られける、

あり經けむ、もとの千年にふりもせで、
わがきみちぎるみねのわか松。

君が代にせき入るる庭をゆく水の、
岩こすかずは、千世も見えけり。

〔五〕〔一〕上のその道をえ給へれば、下もおのづから時を知るならひにや、男も女も、この御代にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊房の左の大臣ときこえし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つかさあさくて、うち續き四位ばかりにて亡せにし人の子なり。まだいと

(一)仙洞御所

(一)孟子に「上に好む者有れば、下必ずこれより甚しき者有り」

若き齡にて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いとありがたく侍りけれ。

〔六〕〔一〕千五百番の歌合の時、院のうへのたまふやう、「こたみは、皆世にゆりたるふるき道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへて、まろが面おこすばかり、よき歌つかうまつれ」とおほせらるるに、面うち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、限りなきすきの程も、あはれにぞ見えける。

〔七〕さてその御百首の歌、いづれもとりどりなる中に、

薄く濃き野邊のみどりの若草に、
あとまで見ゆる雪のむら消え。

草の緑のこきうすき色にて、去年のふる雪の、遲く疾く消えける程を、推しはかりたる心ばへなど、まだしからむ人は、いと思ひよ

(一)建仁元年、後鳥羽院を始め、京極攝政以下男女三十人の歌人に各百首を奉らせた歌合

(一)古今集の序に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」云々

(一)順徳帝

(一)もとの御門　即ち土御門院

(二)御生母

りがたくやこの人、年積るまであらましかば、げにいかばかり日に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くて亡せにし、いといとほしく、あたらしくなむ。

〔八〕何となく明け暮れて、承元二年にもなりぬ十二月二十五日、二の宮御かうぶりし給ふ。修明門院の御腹なり。この御子を、院限りなくかなしきものに思ひ聞えさせ給へれば、になくきよらをつくし、いつくしうもてかしづき奉り給ふ事なのめならず。遂におなじき四年十一月に、御位につけ奉り給ふ。もとの御門、今年こそ十六にならせ給へば、いまだ遙なるべき御盛に、かかるを、いと飽かずあはれと思されたり。

〔九〕この御門は、いとあてにおほどかなる御本性にて、思しむすぼほれぬにはあらねども、けしきにも漏し給はず。世にも、いとどあへなき事に思ひ申しけり。承明門院などは、まいていと胸いた

(一)順徳帝の御代

(一)土御門院

(二)八雲御抄、歌學の書

(三)順徳帝

(一)後鳥羽院

くおぼされけり。

〔一〇〕この御代には、いとけちえむなる事おほく、所々の行幸しげく、好ましきさまなり。建保二年、春日の社に行幸ありしこそ、ありがたき程いどみ盡し、おもしろうも侍りけれ。さてその又の年、御百首の御歌よませ給ひけるに、昨年の事おぼしいでて、内の御製、

かすが山、こぞのやよひの花の香に、
　　そめしこころは、神ぞしるらむ

〔一一〕御心ばへは、新院よりも少しかどめいて、あざやかにぞおはしましける。御才も、やまともろこし兼ねて、いとやむごとなくものし給ふ。朝夕の御いとなみは、和歌の道にてぞ侍りける。末の世に八雲などいふもの作らせ給へるも、この御門の御事なり。

〔一二〕大方、この院の上は、よろづの事にいたり深く、御心もはな

やかに、物にくはしうなどぞおはしましける。夏の頃、水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて、氷水めして、水飯やうのものなど、若き上達部、殿上人どもに賜はさせて、大御酒まゐるついでにも、「あはれ、古への紫式部こそは、いみじくはありけれ。かの源氏物語にも、『近き川の鮎、西川より奉れるいしぶしやうのもの、御前に調じて』と書けるなむ、勝れてめでたきぞとよ。只今さやうの料理つかまつりてむや」などのたまふを、秦の某とかいふ御隨身、高欄のもと近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる笹を少し敷きて、白き米を洗ひて奉れり。「拾はば消えなむ」とにや。「これもけしかるわざかな」とて、御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。

(二)常夏の卷にある文句

第二　新島守

(一)坂上田村麿

〔一〕猛き武士のおこりを尋ぬれば、古へ、田村、利仁などいひけむ

桓武帝の御代に東夷を征討した人

(二)藤原利仁、醍醐帝の御代に下野高座山の賊を平げた人

將軍どもの事は、耳遠ければさし置きぬ、そのかみより今まで、源平の二流ぞ、時により、折にしたがひて、おほやけの御守とはなりにける。桓武天皇ときこえし御門をば、柏原の御門とも申しけり。その御子に、式部卿の御子と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡、維時とて、二人の子をもたりけり。間近く榮えし西八條の清盛の大臣は、かの太郎維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、この頃は、僅にあるか無きかにぞさまよふめる。さてかの維時が名殘は、ひたすらに民となりて、平四郎時政と言ふもののみぞ、伊豆の國北條の郡とかやにあめる。それも維時には六代の末なるべし。

〔二〕また、源氏武者といふも、清和の御門、あるは宇多の院などの御後どもなり。二條の院の御時、平治の亂に、伊豆の國蛭が小島にながされし兵衛の佐頼朝は、清和の御門より八代のながれに、六

(一)韮山村にあり、蓋し狩野川の流派に圍まれた島山

條の判官爲義といひし者の孫なり。左馬頭義朝が三男になむありける。西八條の入道おとど、やうやう榮華おとろへむとて、後白河院をなやまし奉りしかば、安からず思されて、かの賴朝を召し出でて、軍を起し給ひしに、しかるべき時やいたりけむ、平家の人人は、壽永の秋の木がらしに散りはてて、遂にわたつみの底のもくづと沈みにし後、賴朝いよいよ權をほどこして、更に君の御後見を仕うまつる。相模の國鎌倉の里といふ所に居りながら、世を

(二)後鳥羽院

ば掌の中に思ひき。皆人知り給へることなれば、今更に申すもなかなかなれど、院のうへ位につかせ給ひしはじめより、世のかためとなりて、文治元年四月二の階をのぼりしも、八島の内の大臣宗盛をいけどりの賞と聞ゆ。

(三)從二位に敍せられた事

(四)八島にゐた內大臣宗盛

〔三〕北方は、さきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹に、男子二人あり。太郎をば賴家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立ちつぎて、建仁元年六月二十二日從三位、同日將軍の宣旨を賜はる。又の年左衞門督になさるるかかれども、少しおちゐぬ心ばへなどありて、やうやう武士ども背き背きにぞなりにける。

(一)賴朝

〔四〕時政は、遠江守といひて、故大將のありし時より、私の後見なりしを、まいて今は孫の世なれば、いよいよ身おもく、勢そふ事かぎりなく、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時、次郎は義時といへり。次郎は、心も猛く、魂まされるものにて、左衞門督をば、ふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附きしたがひて、思ひ構ふる事などもありけり。

(二)賴家

〔五〕督は、日にそへて人にも背けられゆくに、いといみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中殘おほく、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけ

(一)左衞門督賴家

(二)愚管抄には世の中心地の病とある。そ

れは流行病の事だが、一説には發狂したのだともいふ

め。をさなき子の一萬といふにぞ、世をば讓りけれど、うけひくものなし。入道は、かの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆國へ、溫泉あびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ所にて、遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは、實朝と義時と、ひとつ心にて、たばかりけるなるべし。

(一)賴朝

〔六〕 さて今は、偏に、實朝、(一)故大將の跡を受け繼ぎて、官位とどこほる事なく、よろづ心のままなり。建保元年二月二十七日、正二位せしは、閑院の内裏つくれる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年、權大納言になりて、左大將を兼ねたり。(二)左馬のつかさをさへぞ附けられける。その年、やがて内大臣になりても、なほ大將もとのままなり。父にもやや立ちまさりて、いみじかりき。

(二)京都二條の南、西洞院西一丁にあつた皇居

(三)左馬寮御監

〔七〕 この大臣は、大方、心ばへうるはしく、(一)猛くもやさしくも、よろづめやすければ、ことわりにも過ぎて、武士の靡き隨ふさまも、父にも越えたり。いかなる時にかありけむ、

山は裂け海はあせなむ世なりとも、
君に二ごころ、わがあらめやも。

とぞよみける。

(一)猛き武の方面にもやさしい文の方面にも

〔八〕 時政は建保三年にかくれにしかば、義時はあとを繼ぎけり。故左衛門督の子にて、公曉といふ大德あり。親の討たれにしことを、いかでか安き心あらむ。いかならむ時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣、又右大臣に上りて、大饗など、珍しくあづまにて行ふ。京より、尊者をはじめ、上達部、殿上人、多くとぶらひいましけり。さて鎌倉にうつし奉れる八幡の御社に、神拜に詣づる、いといかめしきひびきなれば、國々の武士は更にもいはず、都の人々も、扈從しけり。立ち騷ぎ、ののしるもの、見る人も多かる中に、かの大德、うちまぎれて、女のまねをして、白き薄衣ひきをり、大臣の車より

(一)賴家

(二)引き折り、深くかぶる意

下るる程を、さしのぞくやうにぞ見えける、あやまたず首を打ち落しぬ。その程のとよみ、いみじさ、思ひやりぬべしかくいふは、承久元年正月廿七日なり。そこらつどひ集れるものども、只あきれたるより外の事なし。京にも聞しめし驚く。世の中火を消ちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひきさならぬ人々も、泣く泣く袖をしぼりてぞ上りける。

〔九〕いまだ子も無ければ、立ちつぐべき人もなし。事靜まりなむ程とて、(一)故大臣の母北方二位殿政子といふ人、(二)二人の子をも亡ひて、涙ほすまもなく、萎れ過すをぞ、(三)將軍に用ひけるかくても、さのみはいかがにて、「公達一所くだし聞えて、將軍になし奉らせ給へ」と、公經の大臣に申し上せければ、あへなむと思すところに、(四)九條の左大臣殿の上は、この大臣の御女なり、その御腹の(五)若君の二つになり給ふを、下し聞えむと、九條殿のたまへば、御孫ならむもお

(一)實朝
(二)賴家と實朝
(三)所謂尼將軍征夷大將軍に任じたのではない
(四)道家
(五)賴經

なじ事と思して、定め給ひぬ。

〔一〇〕その年の六月に、あづまにゐて奉る。七月十九日におはしまし着きぬ。襁褓の中の御ありさまは、ただ形代などを祝ひたらむやうにて、よろづの事、さながら右京權大夫義時朝臣、心のままなり。されど、一の人の御子の將軍になり給へるは、これぞはじめなるべき。かの平家の亡ぶべき世の末に、人の夢に、「賴朝が後は、その御太刀あづかるべし」と、(一)春日大明神仰せられけるは、この今の若君の御事にこそありけめ。

〔一一〕かくて、(一)世を靡かし、したため行ふ事も、ほとほと古きには越えたりまめやかにめざましき事も多くなり行くに、院の上、忍びて思し立つ事などあるべし。近く仕うまつる上達部、殿上人、まいて、北面の下臈、(二)西面など言ふも、皆この方にほのめきたるは、あけくれ、弓矢兵仗のいとなみより外の事なし。劍などを御覽じ知

(一)藤原氏の祖天兒根命を祀る
(一)義時が
(二)後鳥羽院
(三)西面の武士院の御所の西面を警衛する武士

ることさへ、いかで習はせ給ひたるにか、道のものにもやや立ち勝りて、かしこくおはしませば、御前にてよきあしきなど定めさせ給ふ。

〔一二〕　かやうのまぎれにて、承久も三年になりぬ。四月二十日、御門おりさせ給ふ。(一)春宮四にならせ給ふに譲り申させたまふ。近頃皆この御齢にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき廿三日、院號の定ありて、今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院をば中の院と申し、父御門をば本院とぞ聞えさする。このほどは、家實の大臣關白にておはしつれど、御譲位の時、左大臣道家の大臣攝政になり給ふ。(三)かのあづまの若君の御父なり。

(一)順徳帝

(二)仲恭帝

(三)將軍頼經

〔一三〕　さても、(一)院の思し構ふる事、忍ぶとすれど、やうやう漏れ聞えて、東ざまにも、その心づかひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふものあり。かつがつかれを御かうじのよし仰せらるれば、(二)御方に參る武士どもおし寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ、院は思し召しける。

(一)後鳥羽院

(二)御勘事、勅勘

〔一四〕　東にもいみじうあわて騒ぐ。「さるべくて、身のうすべき時にこそあなれ」と思ふものから、「討手の攻め來りなむ時に、はかなきさまにて、屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふことならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかり」と思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ(一)一男と、二人をかしらとして、雲霞の武士をたなびかせて、都にのぼす。

(一)長子

〔一五〕　泰時を前にすゑて言ふやう、「おのれをこの度都にまゐらする事は、思ふ所多し。本意の如く、清き死をすべし。人に後を見えなむには、親の顔また見るべからず。今を限りとおもへ。賤しけれ

(一)武士の本懐通り

(二)後暗きといふ特殊義の例

ども、義時、君の御ために後めたき心やはある。されば、横ざまの死をせむ事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打ち勝つものならば、ふたたびこの足柄箱根山は越ゆべし」など、泣く泣く言ひ聞かす。「まことにしかなり。又親の顔拜む事もいとあやふし」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに、今や限りと、あはれに心細げなり。

(一)義時

〔一六〕 かくて打ち出でぬる又の日、思ひかけぬ程に、泰時ただ一人、鞭を上げて馳せ來たり。父胸うち騒ぎて、「いかに」と問ふに、「軍のあるべきやう、大方のおきてなどをば、仰の如くその心をえ侍りぬ。もし道のほとりにも、計らざるに、辱く鳳輦を先立てて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らむに參りあへらば、その時の進退いかが侍るべからむ。この一事をたづね申さむとて、一人馳せ侍りき」といふ。

(一)土御門院

(二)順德院は後鳥羽院と御心を一つにして

〔一七〕 義時、とばかりうち案じて、「かしこくも問へる男かな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引くことは、いかがあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべしさはあらで、君は都におはしましながら、軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戰ふべし」と、言ひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

〔一八〕 中院は、あかで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきままに、かやうの御騒にも、ことにまじらせ給はざめり。新院は、同じ御心にて、よろづ、軍の事なども、おきて仰せられけり。

〔一九〕 いつの年よりも、五月雨はれまなくて、富士川、天龍など、えもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬もうち渡しがたければ、攻め上る武者どもも、あやしくなやめり。かかれども、遂に都に近づ

くよし聞ゆれば、君の御武者もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや、宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひびきののしる樣、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ち下り、すべて安げなくさわぎ滿ちたり。いかがあらむと、(一)君も御心亂れて、思し惑ふ。

(一)後鳥羽院

〔二〇〕 かねては猛く見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわただしく、色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂にみかたの軍破れぬ。荒磯に高潮などのさし來るやうにて、泰時と、時房と、みだれ入りぬれば、言はむ方なくあきれて、上下ただ物にぞあたり惑ふ。

〔二一〕 東よりいひおこするままに、かの二人の大將軍、はからひおきてつつ、(一)保元のためしにや、院の上、都の外にうつし奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、所々に、思しまどふ事、更なり。(二)本院は、隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましう

(一)保元の亂後崇德上皇を讃岐に遷し奉つた例

(二)後鳥羽院

あはれなり。(三)「ものにもがなや」と思さるるもかひなし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四十に一二や餘らせ給ふらむ。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿うつし書かせらる。(四)七條の院へ奉らせ給はむとなり。かくて同じき十三日に、御船にたてまつりて、遙なる浪路をしのぎおはします御心地、この世のおなじ御身とも思されず、いみじう、いかなりける代々の報にかと、うらめし。

(三)源氏物語河海抄帚木卷の引歌に「とりかへすものにもがなや、世の中をありしながらの我身と思はむ」

(四)御生母

〔二二〕 (一)新院も佐渡の國にうつらせ給ふ。まことや、七月九日、(二)御門をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これやはじめならむ。(三)唐土にぞ、四十五日とかや位におはする例ありけるとぞ、

(一)順德院
(二)仲恭帝
(三)史記秦の始皇本紀に、子嬰が秦王となつて四十六日目に楚將沛公

に破られた事が見えてゐる

(一)土御門院

(二)後に後嵯峨帝とならせ給ふ

唐の書讀みし人のいひし心地するそれもかやうの亂やありけむさて、上達部、殿上人、それより下、はた、殘るなく、この事に觸れにしたぐひは、重く輕く罪に當るさま、いみじげなり。

〔二三〕 (一)中院は、初より知しめさぬ事なれば、あづまにも咎め申さねど、父の院遙にうつらせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらむ事、いとおそれありと思されて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國のはたといふ所に渡らせたまひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮いできたまへり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將と(二)て、若くてうせ給ひし人のむすめの御腹なりやがて、かの宰相の弟に、通方といふ人の家にとどめ奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ、御供つかうまつりける。

〔二四〕 いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら、雪かきくらし、風吹きあれ、吹雪して、こしかた行くさきも見えず、いと堪へ

(一)後鳥羽院は

(二)土御門院

(三)順德院

(四)論語に「子曰く、君子の德は風、小人の德は草、草之に風を上ふれば必ず偃す」

(五)「ひまなき」の序

(六)亂れの序

がたきに、御袖もいたくこほりて、わりなき事多かるに、

うき世には、かかれとてこそ生れけめ、
ことわり知らぬわがなみだかな。

「せめて近き程に」と、あづまより奏したりければ、後には阿波の國にうつらせ給ひにき。

〔二五〕 (一)四にて位に卽き給ひて、十五年おはしましき。おり給ひて後も、(二)土佐院十二年、(三)佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十八年がほど、この國のあるじとして、萬機の政事を、御心ひとつに治め、百の官をしたがへ給へりしそのほど、(四)吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて、遠きをあはれび、近きをなで給ふ御惠、雨の足よりもしげければ、(五)津の國のこやのひまなき政事をきこし召すにも、(六)難波の葦の亂れざらむ事を思しき。

(一)仙人の居る山の名、仙洞御所に譬へる
(二)仙人の住む洞、仙洞御所に譬へる

(一)後鳥羽院の

〔二六〕(一)藐姑射の山の峯の松も、やうやう枝を連ねて、千世に八千代を重ね、(二)霞の洞の御すまひ、いく春を經ても、空ゆく月日の限りしらず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありて、よしなき一ふしに、今はかく、花の都をさへ立ち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからことふものとては、浦につりする蜑小船、鹽燒く煙のなびく方をも、我が故里のしるべにかとばかり、ながめ過ぐさせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日しらぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて、いつを果とか、めぐり逢ふべき限りだになく、雲の浪、煙の波の、幾重とも知らぬ境に、世をつくし給ふべき御さまども、口惜しともおろかなり。

〔二七〕(一)このおはします所は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山蔭にかたそへて、おほきやかなる巖の

(二)新古今集、西行の歌に「いづくにも住まれずばただ住まであらむ、柴の庵のしばしなる世に」
(三)白氏文集に「三五夜中新月色、二千里外故人心」

(一)承久四年となる
(二)順德院
(三)後鳥羽院を申す

峙てるをたよりにて、松の柱に、葦ふける廊など、けしきばかり、事そぎたり。誠に「(一)柴のいほりのただしばし」と、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方に、なまめかしく、ゆゑづきて、しなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも、夢のやうになむ。はるばると見やらるる海の眺望、(二)二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。鹽風のいとこちたく吹き來るを聞しめして、

われこそは新島守よ、おきのうみの
荒きなみかぜ、こころして吹け。

同じ世に、またすみのえの月や見む、
今日こそよそにおきのしま守。

〔二八〕(一)年もかへりぬ。所々浦々、あはれなる事をのみ思しなげく。(二)佐渡院、あけくれ、御行をのみし給ひつつ、なほさりともと思さる。(三)隱岐には、浦よりをちの、はるばると霞みわたれる空を眺め入り

て、過ぎにし方、かきつくしおもほし出づるに、行方なき御涙のみぞとどまらぬ

淡ましながき日かげの春に逢ひて、
　汐くむ海士もそでやほすらむ。

夏になりて、かやぶきの軒端に、五月雨の雫、いとところせきも、御覽じなれぬ御心地に、さまかはりて、珍しくおぼさる。

あやめふくかやが軒端に風過ぎて、
　しどろに落つるむらさめの露。

〔二九〕初秋風のたちて、世の中いとどものがなしく、露けさまさるに、いはむ方なく思しみだる。

ふる里を別路におふる葛の葉の、
　秋はくれども、かへる世もなし。

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、沖の方に、いとちひさき木の葉の浮べると見えて、漕ぎ來るを、あまの釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。

〔三〇〕黑染の御衣、夜の御ふすまなど、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて、七條院(一)よりまゐれる御文、ひきあけさせ給ふより、いといみじく、御胸もせきあぐる心地すれば、ややためらひて見給ふに、「あさましくも、かくて月日經にける事。今日あすとも知らぬ命のうちに、今一度いかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでなむ」など、いと多く亂れ書き給へるを、御顏におし當てて、

垂乳根(二)の消えやらで待つ露の身を、
　風よりさきにいかでとはまし。

八百萬神もあはれめ、たらちねの
　われ待ちえむと絶えぬ玉の緒。

(一)後鳥羽院の御生母

(二)母の枕詞、轉じて母の稱

第三　ふぢ衣

(一)この一句、源氏物語橋姫巻發端の文句をそのまゝ用ひてゐる
(二)第三皇子は惟明親王、守貞親王は第二皇子、宮御選定の時泣き給うたのは惟明親王で、こゝは筆者の記憶錯誤

〔一〕その頃、いとかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞親王とぞ聞えける。高倉院(一)第三の御子なり。隱岐の法皇の御このかみなれば、思へばやむごとなけれど、昔、後白河の法皇、安德院の筑紫へおはしまして後に、見奉らせ給ひける御孫の宮たちえりの時、泣き給ひしによりて、位にも卽かせ給はざりしかば、世の中ものの恨めしきやうにて過し給ふ。さびしく、人目まれなれば、年を經てあれまさりつつ、草ふかく、八重葎のみさしかためたる宮の中に、いと心細くながめおはするに、建保の頃、宮のうちの女房の夢に、冠したるもの數多まゐりて、「劍璽を入れ奉るべきに、おのおの用意して候はれよ」といふと見てければ、いとあやしうおぼえて、宮に語り聞えけれど、「いかでかさほどの事あらむ」と、思しも寄

(三)後鳥羽院
(四)守貞親王
(五)後堀河帝
(一)土御門院
(二)後鳥羽院を申す

らで、遂に御髮をさへおろし給ひて、この世の御望は絶ちはてぬる心地してものし給へるに、このみだれ出で來て、一院(三)の御ぞうは、皆さまざまにさすらへ給ひぬれば、おのづから小きなど殘り給へるも、世にさし放たれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、東よりのおきてにて、かの入道親王(四)の御子の十になり給ふを、承久三年七月九日、俄に御位(五)に卽けたてまつる。父の宮をば太上天皇になし奉りて、法皇ときこゆ。いとめでたく、横ざまの御さいはひおはしける宮なり。

〔二〕まことや、その年十一月十一日、阿波の院(一)かくれさせたまひぬ。いとあはれにはかなき御事かな。例ならず思されければ、御髮おろさせ給ひにけり。ここらものをのみ思して、今年は三十七にぞならせ給ひける。いま一度都をも御覽ぜずなりぬる、いみじうかなしきを、隱岐(二)の小島にも、きこしめしなげく。

(一)後堀河帝御退位
(二)四條帝

〔三〕貞永元年十月四日、おり居させ給ふ。御悩重きによりてなりけり。今上は二歳にぞならせたまふ。あさましき程の御いわけなさにて、いつくしき十善のあるじにさだまり給ふ事、いとゆゆしきまで、前の世ゆかしき御有様なり。

〔四〕かく言ひしろふ程に、院の御悩日々に重くならせ給ひて、八月六日、いとあさましうならせ給ひぬ。世のおもしにておはしますべきことの、かくあへなき御ありさま、口惜しなど聞ゆるもなのめなり。大方、御本性もなごやかに、ららうらうしく、御かたちもまほに美しうととのほりて、二十に三つばかりや餘らせ給ふらむ。若うさかりの御程に、御才なども、和漢たどたどしからず、何事につけても、いとあたらしうおはしませば、世の人の惜み聞ゆるさま、かぎりなし。只くれまどへる心地どもなり。後堀河院とぞ申しける。故宮の御はてだに過ぎず、又とりかさねて、諒闇の三年までにならむことを、いとまがまがしく、ゆゆしと、皆人思ふべし。

(一)中宮藻壁門院

〔五〕さまざまめでたくもあはれにも、いろいろなる都のことどもを、ほのかに傳へ聞し召して、隱岐には、あさましの年のつもりやと、御齢にそへても、盡きせぬ御なげきぐさのみ茂りそふ、慰めには、おぼし馴れにし事とて、敷島の道にのみぞ、御心をのべける。

(一)後鳥羽院を申す

〔六〕この浦にすませ給ひて、十九年ばかりにやありけむ、延應元年といふ二月二十二日、六十にてかくれさせ給ひぬ。今一度都へ歸らむの御志深かりしかど、遂に空しくてやみ給ひにし事、いとかたじけなく、哀になさけなき世も、今更心うし。近き山にて、例のさほうになし奉るも、むげに人ずくなに、心ぼそき御ありさま、いとあはれになむ。

(一)後鳥羽院崩御
(二)火葬

第四　三神山

(一)土御門院の皇子

(二)御祖母承明門院

(一)新撰朗詠集大江朝綱の句に「德は是れ北辰椿葉の影再び改まる、尊は猶ほ南面松花の色十たび廻る」

(一)仁治三年となる

〔一〕(一)土御門殿の宮は、二十にもあまり給ひぬれど、御冠の沙汰もなし。城興寺の宮僧正眞性と聞ゆる、御弟子にと、語らひ申し給ひければ、さやうにもと思して、(二)女院にもほのめかし申させ給ひけるを、いとあるまじき事とのみ、諫め聞えさせ給ふ。

〔二〕その冬の頃、宮いたう忍びて、石清水の社に詣でさせたまひ、御念誦のどかにし給ひて、少しまどろませ給へるに、神殿の内に、「椿葉のかげ二たびあらたまる」と、いとあざやかに、けだかき聲にて、うち誦じ給ふと聞きて、御覽じあげたれば、明方の空すみわたれるに、星の光もけざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる御夢ならむと、あやしく思さるれど、人にものたまはず、とまれかくもあれと、いよいよ御學問をぞせさせ給ふ。

〔三〕年もかへりぬ。春の始は、おしなべて、程々につけたる家々の身のいはひなど、心ゆきほこらしげなるに、正月の五日より、内の

(二)四條帝崩御

(一)賴經

(二)道家

上、例ならぬ御事にて、七日の節會にも、御帳にもつかせ給はねば、いとさうざうしく、人々思しあへるに、九日の曉かくれさせ給ひぬとて、ののしりあへる、いとあさましとも言ふばかりなし。皆人あきれまどひて、なかなか涙だに出でこず。

〔四〕かくのみあさましき御事どものうち續きぬるは、いかにも、かの遠き浦々にて沈みはてさせ給ひにし、御歎どものつもりにやとぞ、世の人もささめきける。御惱のはじめも、なべてのすぢにはあらず。あまりいわけたる御遊より、そこなはれ給ひにけるとぞ。いまだ御つぎもおはしまさず、又御はらからの宮なども渡らせ給はねば、世の中いかになり行かむずるにかと、たどりあへるさまなり。

〔五〕さてしもやはにて、東へぞ告げやりける。(一)將軍は大殿の御子、今は大納言殿と聞ゆ。御後見は、(二)承久に上りたりし泰時朝臣なり。

時房朝臣と一所にて、小弓射させ、酒もりなどして、心とけたる程なりけるに、京よりのはしり馬といへば、何事ならむと驚きながら、使召し寄せて聞くに、いとあさましさりとてあるべきならねば、その席より、やがて神事はじめて、若宮の社にて、(三)鶴岡八幡宮闘をぞとりける。

(一)順徳院の皇子
(二)順徳院の御生母
(三)土御門院の御生母

〔六〕その程、都には、いとうかびたる事ども、心のひきひきいひしろふ。佐渡院の宮たちにやなど聞えければ、(一)修明門院にも、御心ときめきして、内々その御用意などし給ふ。(二)承明門院も、もしやなど、さまざま御いのりし給ふ。東の使、都に入るよし聞ゆる日は、兩女院より、白河に人を立てて、いづかたへか参ると見せられけるぞ、ことわりに、げに、今見ゆべき事なれども、物の心もとなきは、さ覺ゆるわざぞかしと、例の(四)口すげみてほほゑむ。

(四)物語る尼の様子

〔七〕日ぐらし待たれて、城介義景といふもの、三條河原にうち出

でて、「承明門院のおはしますなる院はいづくぞ」と、かの院より立てられたる青侍の、いとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心地、うつつともおぼえず。しかじかと申すままに、(一)土御門殿へ参りたれど、門は葺つよくかため、扉もさびつき、柱根朽ちて、あかざりけるを、郎等どもに、とかくせさせて、内に参りて見まはせば、庭には草ふかく、青き苔のみむして、松風より外は答ふるものもなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の、御弟を子にし給へりし、定通の大臣ばかりぞ、何となく、おのづからの事もやと思ひて、なえばめる烏帽子直衣にて候ひ給ひけるが、中門に出でて、對面し給ふ。義景は、切戸のわきにかしこまりてぞ侍りける。(二)「阿波の院の御子、御位に」と申して出でぬ。院の中の人々、上下、夢の心地して、物にぞあたりまどひける。仁治三年正月十九日の事なり。

(一)承明門院の御所

(二)土御門院の皇子、後嵯峨帝

第五　内野の雪

〔一〕今后の御父は、先にも聞えつる右大臣實氏の大臣、その父、故公經の太政大臣、そのかみ夢見たまへることありて、(一)源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし、北山のほとりに、世に知らずゆゆしき御堂を建てて、名をば西園寺といふめり。この所は、伯三位資仲の領なりしを、尾張の國松枝といふ庄にかへ給ひてけり。もとは田畑などおほくて、ひたぶるに田舍めきたりしを、更にうちかへし、崩して、艶なる園につくりなし、山のたたずまひ木深く、池の心ゆたかにわたつみたたへ、(二)峰よりおつる瀧のひびきも、げに涙催しぬべく、心ばせ深き所のさまなり。

〔二〕北の寢殿にぞ、大臣は住み給ふ。廻れる山の常盤木ども、いとふりたるに、なつかしき程の若木の櫻など、植ゑ渡すとて、大臣う

(一)源氏の君が瘧病をまじなひに北山の律師の坊に籠つた事が源氏若紫の卷にある

(二)源氏物語若紫の卷に「吹きまよふみ山おろしに夢さめて、涙もよほす瀧の音かな」

そぶき給ひけり。

山櫻みねにもをにもうゑ置かむ、
見ぬ世の春を人やしのぶと。

かの法成寺をのみこそ、いみじきためしに、(一)世繼もいひためれど、これは猶、山の景色さへおもしろく、都はなれて、眺望そひたれば、言はむ方なくめでたし。

〔三〕京には、さまざまめでたき事のみ多かるに、かの佐渡の島には、御惱と聞えし、程なく九月十二日かくれさせ給ひぬ。(一)世の中の改りしきざみ、もしやなど思しよる事どもありしも、空しう、隔りのみはてぬる世を、いと心細う聞し召しけるに、そこはかとなく、御惱など重るやうにて、うせ給ひにけるとぞ聞えし。四十六にぞならせ給ひけるいと哀なる世の中なるべし。

〔四〕(一)寶治の頃、神無月二十日餘なりしにや、紅葉御覽じに宇治に

(一)藤原道長の建立
(二)大鏡

(一)順德院崩御
(二)四條帝崩御時勢一變の際

(一)後深草帝の年號

御幸し給ふ。上達部、殿上人、思ひ思ひいろいろの狩衣、菊紅葉の濃きうすき、縫物、織物、綾錦、すべて世になき清らを盡しさわぐ。いみじき見物なり。殿上人の船に樂器を設けたり。橘の小島に御船さしとめて、物の音ども吹きたてたるほど、水の底も耳たてぬべく、そぞろ寒きほどなるに、折知りがほに、空さへうちしぐれて、まきの山風あらましきに、木の葉どもの、いろいろ散りまがふけしき、いひ知らず面白し。女房の船に、いろいろの袖口、わざとなくこぼれ出でたる、夕日に輝きあひて、錦を洗ふ九の江かと見えたり。平等院に、中一日わたらせ給ひて、さまざまのおもしろき事ども、數知らず、網代に氷魚のよるもさながらののしり明かして、かへらせ給ふ。

(一)寛元四年正月、後深草帝に讓位、その後の後嵯峨院の御幸

(二)水底なるも

(三)拾遺集、清原元輔の歌に「月影の田上川に清ければ、網代に氷魚のよるも見えけり」

第六　烟の末々

(一)寶氏

(二)後嵯峨院の御幸

(一)太政大臣の津の國吹田の山庄にも、いとしばしばおはしまさせて、さまざまの御遊、數をつくし、いかにせむと、もてはやし申さる。川に臨める家なれば、秋深き月のさかりなどは、殊に艶ありて、門田の稻の風に靡くけしき、妻訪ふ鹿の聲、衣うつ砧の音、峰の秋風、野邊の松蟲、とり集めあはれ添ひたる所のさまに、鵜飼などおろさせて、篝火どもともしたる川の面、いと珍しうをかしと御覽ず。日比おはしまして、人々に十首の歌召されしついでに、院の御製、

川船のさしていづくかわがならぬ、
旅とはいはじ、やどとさだめむ。

と講じ上げたるほど、主の大臣、いみじう興じ給ふ。「この家の面目、今日に侍る」とぞ宣はする。けにさる事と、聞く人皆ほこらしくなむ。

(一)後嵯峨院

(二)後深草帝

〔二〕さても院の第一の御子は、源氏にやなし奉らましなど思すに、猶飽かねば、ただ御子にて、東の主になし聞えてむと思して、建長四年正月八日、院の御前にて御冠し給ふ。(一)御門の御元服にもほとほと劣らず、内蔵寮、何くれ、清らを盡し給ふ。やがて三品の位たまはり給ふ。御年十一なるべし。中務卿宗尊親王と申すめり。

〔三〕おなじ二月十九日に都を出で給ふ。その日、將軍の宣旨蒙り給ふ。かかる例は、いまだ侍らぬにや。上下、珍しくおもしろき事にいひ騒ぐべし。御迎に、東の武士ども數多上り、六波羅よりも、名あるもの十人、御送に下る。上達部、殿上人、女房など、あまたまゐるも、〔院中の奉公にひとしかるべし。かしこに候ふとも、限あらむつかさかうぶりなどは、さはり有るまじ〕とぞ仰せられける。何事も、只、人がらによると見えたり。きはことに、よそほしげなり。誠に、おほやけとなり給はずば、これよりまさること、何事かあらむ。にぎは

(一)後嵯峨院

(一)三十三天の中宮なる帝釋の宮殿を善見城といひ、その中央を殊勝殿といふ。本文の「殊妙」はその誤かといふ

(一)後嵯峨院の御幸

はしく、花やかさは、ならぶ方なし。(一)院の上も、忍びて、粟田口のほとりに御車立てて、御覽じ送りけるこそ、あはれにかたじけなく侍れ。きびはに、美しげにて、遙々とおはしますを、御母の内侍は、あはれにかたじけなしと思ひ聞ゆべし。

〔四〕かかれば、もとの將軍頼嗣三位中將は、その四月に都へ上り給ひぬ。いとほしげにぞ見え給ひける。さて、今下り給へるを、もて崇め奉るさま、いはむ方なし。宮の中のしつらひ、御まうけの事など、限あれば、善見天の殊妙の莊嚴もかくやとぞ覺えける。かやうにて今年は暮れぬ。

〔五〕その頃ほひ、熊野の(一)御幸侍りしにも、よき上達部、あまた仕うまつらせ給ふ。都出でさせ給ふ日、例の棧敷など、心ことにいどみかはすべし。車は立てぬ事なりしかど、大宮院ばかり、それも出車はなくて、只一輛にて見奉り給ひしこそ、やむごとなさも、面白く

侍りけれ。辨の内侍、

をりかざすなぎの葉風のかしこさに、
ひとりみちあるをぐるまのあと。

〔六〕御幸、熊野の本宮につかせ給ひて、それより新宮の川船に奉りて、さし渡すほど、川のおもて所せきまで續きたるも、御覽じなれぬさまなれば、院のうへ、

熊野川、せぎりにわたすすぎぶねの、
へなみにそでの濡れにけるかな。

その後も、又、程なく御幸ありしかば、女院も參り給ひけり。皆人しろしめしたらむ事、なかなかにこそ。

第七　おりゐる雲

〔一〕かくのみ所々に御幸しげう、御心ゆく事ひまなくて、いささ

(一)後嵯峨院御製

(一)後嵯峨の御幸

かも思し結ぼるる事もなく、めでたき御有樣なれば、仕うまつる人々までも、思ふ事なき世なり。吉田の院にても、常は御歌合などし給ふ。鳥羽殿には、いと久しくおはします折のみあり。春の頃、御幸ありしには、御門も御鞠に立たせ給へり。二條關白あげ鞠したまひき。内の女房など召して、池の御船に乘せて、物の音ども吹き合せ、樣々の風流のわりご、引出物など、こちたき事どももしげかりき。

〔二〕嵯峨の龜山の麓、大井河の北の岸にあたりて、ゆゆしき院をぞ造らせ給へる。小倉の山のこずゑ、戸無瀬の瀧も、さながら御垣の中に見えて、わざとつくろはぬ前栽も、おのづからなさけを加へたる所がら、いみじき繪師といふとも、筆及びがたし。

第八　山のもみぢ葉

(二)山城國愛宕郡

(三)後深草帝

(四)良實

(一)龜山殿の御前

(二)今上は龜山帝、後深草帝は正元元年十一月御退位

(三)後嵯峨院

〔一〕御前の汀に船ども浮べて、をかしきさまなる童、四位の若きほど乘せて、花の木蔭より漕ぎ出でたるほど、になく面白し。舞樂さまざま、曲など手をつくされけり。御遊の後、人々歌奉る。花契遐年といふ題なりしにや。内の上の御製、

たづね來て、あかぬ心にまかせなば、
千とせや花のかげにすごさむ。

かやうの方までも、いとめでたくおはしますとぞ、古き人々申すめりし。かへらせ給ふ日、御贈物ども、いとさまざまなる中に、延喜の御手本を、鶯のゐたる梅の造枝につけて、奉らせ給ふとて、院のうへ、

梅が枝に、代々のむかしの春かけて、
かはらず來居るうぐひすの聲。

御返を忘れたるこそ、老のつもり、うたて口惜しけれ。

(一)大井川

(二)古今集、秋、貫之の歌に「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」

(一)宗尊親王

〔二〕川浪も、更け行くままに凄う、月は氷をしける心地するに、嵐の山の紅葉、夜の錦とは誰か言ひけむ、吹きおろす松風にたぐひて、御前の簀子にて御酒まゐるかはらけの中などに散りかかる、わざと艶なる事のつまにもしつべし。若き人々は、身にしむばかり思へり。うち亂れたるさまに、各御かはらけども數多たび下る。明けゆく空も名殘おほかるべし。

第九　北野の雪

〔一〕東に何事にか煩しきことと出で來にたりとて、將軍、七月八日、俄なるやうにて、御のぼりありけり。かねては、始めて御のぼりあらむ時の儀式など、になくめでたかるべきよしをのみ聞きしに、思ひかけぬ程に、いとあやしき御ありさまにて、御のぼりあり。御くだりの折、六波羅の北方に建てられたりし檜皮屋に、おちつか

せおはしましぬ。この頃、東に、世の中おきてはからふ主は、相模守時宗と、左京權大夫政村朝臣なり。時宗といふは、時頼朝臣の嫡子、政村とは、ありし義時の四郎なり。京の兩六波羅は、陸奥守時茂、式部大輔時輔とぞ聞ゆる。

〔二〕中務の御子の御のぼりの代に、かの御子の三になり給ふ若君達、近衛殿の姫君の御腹ぞかし、七月二十七日に、將軍の宣旨かうぶらせ給ひて、やがて四品し給ふ。經任の中納言を御使にて、東へ下されなどして、苦しからぬ御事になりぬとて、十月ばかりに、故承明門院の御跡、土御門萬里小路殿へ御うつろひありて後ぞ、院の上、御母准后なども參り、はじめて御對面あり。さるべき人々も、參り仕うまつりなどして、世のつねの御有樣にはなりにけれど、建長四年、御年十一にて御下ありし後、今迄十五年が程、にぎはしく、いみじうもてあがめられさせ給ひて、ゆゆしかりつる御

(一)中務卿宗尊親王
(二)惟康親王
(三)兼經
(四)後嵯峨院

住ひにひきかへて、もの淋しく、心細うなど思さるる折々もありけるにや、

虎とのみもてなされしは昔にて、
いまはねずみのあなう世の中。

又、雪のいみじう降りたる朝、右近の馬場の方御覽じにおはしまして、よませ給ひける、

なほたのむ、北野の雪の朝ぼらけ、
あとなきことに埋もるる身は。

など聞えき。

〔三〕大方、この御子の、歌のひじりにておはします事、皆人の口に侍るべし。「枯野の眞葛霜とけて」なども、人毎にめでののしる御歌なるべし。されば、世を亂らむなど思ひよりける武士の、この御子の、御歌すぐれて詠ませ給ふを、夜晝いとむつまじく仕うまつり

(一)宗尊親王
(二)續古今、冬、「日影さす枯野の眞葛霜とけて、過ぎにし秋にかへる露かな」

ける程に、おのづから同じ心なるものなど多くなりて、宮の御氣色あるやに言ひなしけるとかや。

第十　あすか川

〔一〕ひまゆく駒の足にまかせて、文永も五年になりぬ。正月二十日、本院(一)のおはします富小路殿にて、今上(二)の若宮、御五十日きこしめす。いみじうきよらを盡さるべし。今年正月に閏あり。後の二十日餘の程に、冷泉院にて、舞御覽あり。明けむ年、一院(三)、五十に滿たせ給ふべければ、御賀あるべしとて、今より世のいそぎにきこゆ。

〔二〕かやうに聞ゆる程に、むくり(一)の軍といふ事おこりて、御賀とどまりぬ。人々口をしく、本意なしと思す事かぎりなし。何事もうちさましたるやうにて、御修法や何やと、公家、武家、ただこのさわぎなり。されども、程なくしづまりて、いとめでたし。

(一)後嵯峨院
(二)龜山帝の皇子、後宇多帝とならせ給ふ御方
(三)後嵯峨院

(一)蒙古

〔三〕一院(一)は、御本意遂げ給はむ事を、やうやう思す。その年の九月十三夜、白河殿にて、月御覽ずるに、上達部、殿上人、例の多く參りつどふ。御歌合ありしかば、内の女房ども召されて、色々の引物、源氏五十四帖の心、樣々の風流にして、上達部、殿上人までも、分ちたまはす。院の御製、

我のみや影もかはらむ、あすか川、
おなじ淵瀨に月はすむとも。

かねてより袖もしぐれて、墨染の
ゆふべ色ます峯のもみぢ葉。

この御歌にてぞ、御本意の事おぼし定めけりと、皆人袖をしぼりて、聲もかはりけり。あはれにこそ。民部卿入道爲家判せさせられけるにも、「身をせめ、心を碎きて、かきやる方も侍らず」とかや奏しけり。

(一)後嵯峨院
(二)御出家の御素志

〔四〕かくて、神無月の五日、龜山殿へ御幸なる。今日をかぎりの御たびなれば、心ことに、ととのへさせ給ふ。(一)新院も、例のおはします。大宮、東二條、ひとつ御車にて、おなじく渡らせ給ふ。まづ北野、平野の社へ御まゐりあれば、御隨身ども、花ををりつくし、今日をかぎりと、樣あしきまでさうぞきあへり。兩社にて馬あげさせられけり。神もいかに名殘多く見給ひけむ。空さへうちしぐれて、木の葉さそふ嵐も、をり知り顏に、物悲しう、涙あらそふ心地し給ふ人々多かるべし。中務の御子、(二)「今日の袂さぞしぐるらむ」と宣ひし御返、中將、

袖濡す今日をいつかと思ふにも、
しぐれてつらき神無月かな。

第十一　草まくら

(一)後深草院

(二)御歌の句と考へられるが全歌は何にも見當らなくて未詳

(一)文永九年二月後嵯峨崩御文永十一年正月龜山帝讓位後宇多帝卽位

〔一〕この頃は、ありし時頼朝臣の子時宗、相模守といふぞ、世の中はからふ主なりける。故時頼朝臣は、康元元年に頭おろして後、忍びて諸國を修行しあるきけり。それも、國々の有樣、人のうれへなど、委しくあなぐり見聞かむの謀にてありける。あやしの宿に立ち寄りては、その家主がありさまを問ひ聞き、ことわりある愁などの埋もれたるを聞きひらきては、「我はあやしき身なれど、昔よろしき主をもち奉りし、いまだ世にやおはすると、消息奉らむ。もてまうでて聞え給へ」などいへば、「なでう事なき修行者の、何ばかりかは」とは思ひながら、言ひ合せて、その文をもちて、東へ行きて、しかじかと、教へしままにいひて見れば、(二)入道殿の御消息なりけり。「あなかま、あなかま」とて、永く愁なきやうに計らひつ。「佛神のあらはれたまへるか」とて、みな額をつきて悅びけり。かやうの事、すべて數しらずありしほどに、國々も心づかひをのみしけり。最明

(二)時頼

寺入道とぞいひける。

第十一　老のなみ

〔一〕その頃、蒙古おこるとかやいひて、世の中さわぎ立ちぬ。いろいろさまざま恐しう聞ゆれば、「本院、新院は、あづまへ御下りあるべし。内、春宮は、京に渡らせたまひて、東の武士ども上り候ふべし」など沙汰ありて、山々寺々、御祈かずしらず。伊勢の勅使に、經任大納言まゐる。新院も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老召されて、眞讀の大般若供養せらる。太神宮へ御願に、「我が御代にしも、かかる亂出できて、誠にこの日本のそこなはるべくば、御命を召すべき」よし、御手づから書かせたまひけるを、大宮院、「いとあさましきことなり」と、猶諫め聞えさせ給ふぞ、ことわりにあはれなる。東にも、いひ知らぬ祈ども、こちたくののしる。故院の御代にも、御賀の試

(一)弘安年間
(二)後深草院と龜山院
(三)後宇多帝
(四)後嵯峨院

樂の頃、かかる大事ありしかど、程なくこそしづまりにしを、この度は、いとにがにがしう、牒狀とかや持ちて參れる人などありて、わづらはしう聞ゆれば、上下、思ひまどふ事かぎりなし。

〔二〕されども、七月一日、おびただしき大風吹きて、異國の船六萬艘、兵乘りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、あるは水に沈み、おのづから殘れるも、なくなく本國へ歸りにけり。石清水の社にて、大般若供養說法いみじかりける刻限に、晴れたる空に、黑雲一むら、俄に見えてたなびく。かの雲の中より、白き羽にてはぎたる鏑矢の大きなる、西をさして飛び出でて、鳴る音おびただしかりければ、彼處には、大風の吹き來ると、兵の耳には聞えて、浪荒くたち、海の上あさましくなりて、皆沈みにけるとぞ。猶吾が國に神のおはします事、あらたに侍りけるにこそ。

(一)弘安四年
(二)敵の兵士
(三)あらたかに

第十三　今日のひかげ

〔一〕正應三年三月四日五日の頃、紫宸殿の獅子狛犬、中よりわれたる、驚きおぼして、御占あるに、血流るべしとかや申しければ、いかなる事のあるべきにかと、誰も誰も思しさわぐに、その九日の夜、右衛門の陣より、おそろしげなる武士三四人、馬に乘りながら、九重の中へ馳せ入りて、上に昇りて、(一)女孺が局の口に立ちて、「やや」といふものを、見あげたれば、丈高くおそろしげなる男の、赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧着て、只赤鬼などのやうなる面つきにて、「御門はいづくに御よるぞ」と問ふ。「夜のおとどに」といらふれば、「いづくぞ」と又問ふ。「南殿より東北の隅(二)と敎ふれば、南ざまへ歩みゆく間に、女孺内より參りて、權大納言典侍殿、新内侍殿などに語る。うへは中宮の御方に渡らせ給ひければ、對の屋へ忍びて逃げさ(三)

(一)掃部司の女官、殿中の掃除や指油等の雜役をするもの

(二)西北の隅といふべきを僞つて迂回させたわけ

(三)伏見帝、正應元年三月卽位

せ給ひて、春日殿へ、(四)女房のやうにて、いと怪しきさまをつくりて、入らせ給ふ。内侍劔璽を取りて出づ。女孺は玄象鈴鹿(五)とりて逃げけり。春宮をば、中宮の御方の按察殿抱き參らせて、常磐井殿へ徒歩にて逃ぐ。その程の心の中ども、いはむ方なし。この男をば、淺原のなにがしとかいひけり。

〔二〕辛くして夜のおとどへ尋ね參りたれども、大かた人もなし。中宮の御方の侍の長景政といふもの、名のり參りて、いみじく戰ひ防ぎければ、疵かうぶりなどしてひしめく。かかる程に、二條京極の篝屋(一)備後守とかや、五十餘騎にて馳せ參りて、鬨をつくるに、合する聲僅に聞えければ、心やすくて、内にまゐる。御殿どもの格子ひきかなぐりて、亂れ入るに、かなはじと思ひて、夜の御殿の御茵のうへにて、淺原自害しぬ。太郎なりける男は、南殿の御帳の内にて自害しぬ。弟の八郎といひて、十九になりけるは、大床子のあ

(一)篝火をたいて市中を警衛する役所の役人

(四)帝の御母玄輝門院の御所

(五)玄象は琵琶、鈴鹿は和琴、何れも累代の名器

しの下にふして、寄るものの足をきりきりしけれども、さすが數多して搦めむとすれば、かなはで自害すとて、腸をば皆繰り出して、手にぞもたりける。そのままながら、いづれをも、六波羅へかき續けて出しけり。

第十四　つげの小櫛

〔一〕さても、石清水の流をわけて、關の東にも、若宮ときこゆる社おはしますに、八月十五日、都の放生會(一)をまねびて行ふ。そのありさま、誠にめでたし。將軍もまうで給ふ。位あるつはもの、諸國の受領どもなど、いろいろの狩衣、思ひ思ひの衣かさねて出立ちたり。赤橋といふ所に、將軍御車とどめて下り給ふ。上達部は、うへのきぬなるもあり。殿上人など、いと多く仕うまつれり。この將軍は、中務(三)の宮の御子なり。このころ、權中納言にて、右大將かね給へれば、

(一)社前で魚鳥を放つ法會

(二)鎌倉八幡宮社前にあつて、本社への通路になつてゐる反橋

御隨身ども、花を折らせてさうぞきあへるさま、都めきておもしろし。法會のありさまも、本社にかはらず。舞樂、田樂、獅子がしら、流鏑馬など、さまざま、所にしつけたる事ども、おもしろし。十六日にも、猶かやうの事なり。棧敷どもいかめしく造り竝べて、いろいろの幔幕などひき續けて、將軍の御棧敷の前には、相模守をはじめ、そこらの武士ども、竝居たるけしき、さまかはりて、好ましう、うけばりたる、心地よげに、所につけては、又なく見えたり。

〔二〕その後、いくほどなく、鎌倉より騷(一)がしき事出で來て、皆人きもをつぶし、さざめくといふ程こそあれ、將軍都へ流され給ふとぞ聞ゆる。めづらしき言の葉なりかし。近く仕うまつる男女、いと心細く、思ひ歎く。たとへば御位などのかはる氣色に異ならず。さて上らせ給ふありさま、いとあやしげなる網代の御輿を、逆に寄せて乘せ奉るも、げにいとまがまがしき事のさまなり。うちまか

(三)宗尊親王の御子

(一)執權貞時が管領平賴綱の讒を信じて、外戚安達泰盛父子を殺し、後賴綱の非望を知つて之を誅し、遂に惟康將軍を廢するに至つた事變

せては、都へ御上りこそ、いとおもしろくもめでたかるべきわざなれど、かくあやしきは珍かなり。

〔三〕文永三年より今年まで二十四年、將軍にて、天下のかためといつかれ給へれば、日の本の兵をしたがへてぞおはしましつるに、今日は彼等にくつがへされて、かくいとあさましき御有樣にてのぼり給ふ。いといとほしう、あはれなり。道すがらも、思し亂るるにや、御たたう紙の音しげう漏れ聞ゆるに、たけきもののふも、涙おとしけり。

〔四〕(一)年かへりぬれば、嘉元も三年になりぬ。萬里小路殿の法皇、また御惱とて、龜山殿へ遷らせ給ふ。いろいろに、御修法や何くれ御祈ども、こちたくせさせ給へるも、しるしなくて、九月十五日のあけぼのに、終にかくれさせ給ひぬ。去年今年の世のさがなさ、打續きたる人々の御歎ども、いはむ方なし。

(一)正應五年、永仁六年、正安三年、乾元一年を經て嘉元となる
(二)龜山法皇

〔五〕さてしもあらぬ習なれば、同じ十七日に、御わざの事せさせたまふ。ことわりといひながら、いといかめしう人々仕う奉り給ふ。よそほしかりつる御ありさまも、いとほどなく、只ときの間の煙にてのぼり給ひぬれば、誰も誰も夢の心地して、ほのぼのと明けゆく程に、おのおのまかで給ふ。三條大納言入道公貫、萬里小路大納言師重などは、とりわき御志深くて、(一)御茶毘のはつるまで、墨染の袖を顏におし當てつつ候ひ給ふ。かねてより山道造られて、木草きり拂ひなどせられつれど、露けさぞ分けむ方なき涙の雨の添ふなるべし。內よりの御使には、はじめ長親朝臣、雅行、有忠朝臣など、三度まゐる。ふるき例なるべし。

〔六〕(一)院の二のみこの、忠繼の宰相の女、今は准后と聞ゆる御腹におはします、この頃(二)帥宮と聞ゆるを、(三)法皇とりわき御傍さらずならはし奉り給ひて、いみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば、人

(一)火葬の御儀

(一)後宇多院
(二)太宰帥に任ぜられ給うたからの稱、後に後醍醐帝と

ならせ給ふ
(三)龜山法皇

より殊に思し歎くべし。頃さへ時雨がちなる空のけしきに、山の木の葉も涙あらそふ心地して、いとかなし所がらしも、いとどあはれを添へたり。川浪のひびき、戸無瀬の瀧の音までも、とり集めたる御心の中どもなり。(四)御日數のほどは、帥宮ひとつ御腹の内親王なども、この院におはします程、つれづれなるままに、はかなし事など聞えかはして、花紅葉につけても、睦じくなれ聞え給ふべし。

(四)御中陰の四十九日の間

第十五　うら千鳥

(一)伏見院御出家の御本懷

〔一〕正和も二とせになりぬ。今年(一)御本意遂げなむと思さる。九月の暮つかた、賀茂に忍びて御籠の程、をかしきさまの事ども侍りけり。近く候ふ女房どもも、うちしほたれつつ、つごもりがたの空のけしき、いとものあはれなるに、御製、

ながつきや、木の葉も未だつれなきに、
　しぐれぬ袖のいろや變らむ。

また、

わが身こそあらずなるとも、秋の暮
　をしむ心はいつもかはらじ。

人々も、さと時雨わたり、袖の上、今日をかぎりの秋の名殘よりも忍びがたし。大納言爲子、

ひとすぢに暮れゆく秋を惜まばや、
　あらぬ名殘を思ひそへずて。

又誰にか、

いかにしたひ、いかに惜まむ、年々の
　秋にはまさる秋のなごりを。

十月十五日、伏見殿へ御幸あり。かぎりの旅と思せば、えもいはず

引きつくろはる。庇の御車なり。上達部殿上人數しらず仕うまつり給ふ。

第十六　秋のみ山

(一)花園帝御退位
(二)後醍醐帝、三月二十九日御即位
(三)後宇多法皇の院政

〔一〕文保二年二月二十六日、(一)御門おりゐさせ給ふ。春宮は既に三十にみたせ給へば、待遠なりつるに、めでたく思さるべし。(二)法皇都に出でさせ給ひて、世の中しろしめさる。亀山殿はさる事にて、近頃は、大覺寺のほとりに御堂たてて籠りおはしましつつ、いよいよ密教の深き心ばへをのみ勤め學ばせ給へば、おのづからも京に出させ給ふ事なく、又參りかよふ人も稀なるやうにて、神さびたりつるを、引きかへ、事しげき世に、行もけだいし給へば、むづかしく思さる。

〔二〕かくて今年は暮れぬ。まことや、こたみの春宮には、後二條院

(一)後醍醐帝が皇太子でいらせられた時の通りにして

(一)花園院
(二)後伏見院
(三)花園院は後伏見の御猶子

の一の御子定まり給ひぬれば、(一)御門坊にておはしましし時のまに、冷泉萬里小路殿の寢殿にうつり住ませ給へるに、二月の頃、軒の櫻さかりにをかしき夕ばえを御覽じて、内に奉らせ給ふ。かの花につけて、

なれにける花は心やうつすらむ、
同じのき端の春に逢へども。

御かへしは、南殿の櫻にさしかへ給ふ。

花はげに思ひ出づらむ、春をへて、
あかぬいろ香にそめし心を。

〔三〕おりゐの御門は、(一)御兄の本院と、ひとつ持明院殿にすませ給ふ。もとより御子のよしにておはしませば、まいて一つ院の内にて、いささかもへだてなく聞えさせ給ふ。いと思ふやうなる御ありさまなり。さるべき御中といへども、昔も今も、御腹など變りぬ

るは、いかにぞや、そばそばしき事もうちまじり、くせある習ひにこそあるを、この院の御あはひ、まめやかにおもほしかはしたる、いとありがたうめでたし。

〔四〕衛士のたく火も月の名だてにやとて、安福殿へ渡らせたまふ。忠定中將、晝の御座の御佩刀をとりて參る。殿上のかみの戸を出でさせ給ひて、無名門より、右近の陣の前を過ぎさせ給へば、遣水に月の映れる、いとおもしろし。安福殿の釣殿に床子たてて、東面におはします。上達部は簀子の高欄にせなかおしあてつつ、殿上人は庭に候ひあへるも、いと艶なり。池の御船さしよせて、左右の講師、隆資、爲冬、乘せらる。御みきなど參るさまも、うるはしきことよりは、艶になまめかし。

〔五〕人々の歌、いたくけしきばみて、とみにも奉らず、いと心もとなし。照る月なみも曇なき池の鏡に、いはねどしるき秋のなかば、

御 (一)後醍醐帝渡

(二)四角張つた本式の御宴よりも却て

げにいとことなる空の氣色に、月も傾きぬ。明方近うなりにけり。

うへの御製、(一)

鐘の音も傾く月にかこたれて、
惜しと思ふ夜はこよひなりけり。

と講じあげたるほど、景陽の鐘も響を添へたる、折柄いみじうなむ。いづれもけしうはあらぬ歌ども、多く聞えしかど、御製の鐘の音にまされるは無かりしにや。

第十七　春のわかれ

〔一〕四月の末つ方より、法皇御惱重くならせ給へば、天下の騷ぎおもひやるべし。御門もいみじく思し歎き、御修法どもいとこちたく、またまた始め加へさせ給へど、しるしなくて、日々に重らせ給へば、夜晝となく、いかにいかにと、とぶらひ奉らせ給ふ。若き上

(一)後醍醐帝の御製

(二)南史齊武裴皇后傳に、景陽樓上の鐘聲を聞いて、宮人は早起粧飾するとあるを背景とした文飾

(一)後宇多法皇

(二)後醍醐帝

達部などは、直衣に柏夾して、夜中曉となく、遙けき嵯峨野を、寮の御馬にて、馳せありきたまふめり。今はむげに頼みなきよし聞ゆれば、大覺寺殿へ行幸あり。萬の事ども聞えさせ給ふ。(三)上の一つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるを、いとかなしきものに思ひ聞えさせ給ひて、この大覺寺に、そこらの御莊御牧など寄せたまふ。(四)法のあるじとしておはしますべく、思しおきてけりさやうの事など、見給へざらむあと、後めたからぬさまなどぞ、聞えさせ給ひける。

(三)後醍醐帝と同じく談天門院の御腹

(四)性圓法親王が大覺寺の法主として

〔二〕正中元年六月二十五日、終にかくれさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。御門、御服たてまつる。あけくれねむごろに(一)けうじ奉り給ふさま、いとかたじけなし。御女の皇后宮ときこえし、今は達智門院と申すも、まいて、一所をのみ頼み聞えさせ給へるに、心細う、いみじと思し歎く事、かぎりなし。

(一)孝養を盡し給ふ、御法養を營み給ふ

(二)天皇妃と限らず御資格上斯く申上げる例もあつた

〔三〕そのころ、ながつき月ばかり、まだしののめの程に、世の中いみじく騒ぎののしる。なに事にかと聞けば、美濃國の兵にて、(一)土岐の十郎とかや、また(二)多治見の藏人などいふものども、忍びのぼりて、四條わたりに立ちやどりたる事ありて、人に隱れて居りけるを、早う又告げ知らするものありければ、俄にその所へ、六波羅よりおし寄せて、搦めとるなりけり。あらはれぬとや思ひけむ、彼のものどもは、やがて腹切りつ。又別當資朝、藏人内記俊基、同じやうに武家へとられて、きびしく尋ね問ひ、まもりさわぐ。事の起りは、御門かの武士どもを召したるなりとぞ、いひあつかふめる。さて、その(三)宣旨なしたる人々とて、(四)この二人をも東へ下していましむべしとぞ聞ゆる。いかさまなることの出で來べきにかと、いと恐ろしく、むづかし。

(一)源頼光の裔土岐頼兼

(二)土岐の一族名は國長

(三)土岐や多治見

(四)資朝と俊基

〔四〕過ぎにし頃、資朝も、山伏のまねびして、柿の衣に綾藺笠といふもの着て、あづまの方へ忍びて下れりしは、少しはあやしかりし事なり。早うかかる事どもにつけて、(一)あなたざまにも、宣旨を受くるもののありけるなめり。俊基も、紀伊國へゆあみに下るなどいひなして、田舎ありきしたりしも、今ぞ皆人思ひ合はせける。

(一)東國の方

〔五〕さるままには、いひ知らず聞ゆる事どもあれば、まだきに、いと口をしう思されて、このことを、先づおだしく止めむとおぼせば、かの(一)正應にありしやうなる誓の御消息を遣はす。宣房の中納言、御使にてあづまへ下る。大かた、ふるき御世より仕へ來て、年もたけたるうへ、この頃は、天下に、いさぎよく、うべうべしき人に思はれたる頃なれば、この事、更に御門の知しめさぬよしなど、けざやかにいひなすに、荒きえびすどもの心にも、いと忝き事となごみて、(二)ぶいなるべく奏しけり。

(一)淺原の亂の時龜山上皇が誓書を貞時に賜つたのをいふ

(二)無異、別條なく平穏に事をすますの意

〔六〕この御使の賞にや、宣房、大納言になされぬ。いといみじき幸なり。親は三位ばかりにて入道してき。(一)子どもなどさへ、いと清げにて、あまたあめり。されば、おほやけは知しめされぬにても、かの人々は遁るべきかたなしとて、(二)別當は佐渡の國へ流されぬ。俊基は、いかにして遁れぬるにか、都へ還りぬれど、ありしやうには出でつかへず、籠り居たるよしなり。かやうにて、事なく鎭まりぬれば、いとめでたけれど、うへの御心の中は、猶安からず、いかならむ時とのみ、おもほしわたるべし。

(一)宣房の親の資通

(二)男の子は藤房と季房、「あまた」といふのは女の子をも考へて書いたものだらう

(三)資朝

〔七〕月日程なく遷り行きて、嘉暦元年になりぬ。三月の始つ方より、(一)春宮例ならずおはしまして、日々に重らせ給ふ。さまざまの御修法どもはじめ、御祈、なにやかやと、伊勢にも御使奉らせ給へど、かひなくて、三月二十日、遂にいとあさましくならせたまひぬ。宮の内、火をけちたる心地して、惑ひあへり。

(一)邦良親王

〔八〕有忠の中納言、先坊の御使にて、東に下りにし、いつしかと、思ふさまならむ事をのみ待ち聞えつつ、踐祚の御使の都に參らむと同じやうに上らむとて、いまだ彼處にものせられつるに、かくあやなき事の出で來ぬれば、いみじともさらなり。三月三十日、やがてかしこにて頭おろす。心の中さこそはと悲し。

(一)先皇太子邦良親王

おほかたの春の別れの外に、また、

我が世つきぬる今日の暮かな。

第十八　むら時雨

〔一〕その夏の頃、御門例ならずおはしまして、御藥の事など聞ゆ。いと重くのみならせ給ふとて、世の中あわてたるさまなり。時しもあれや、かの一年とられたりし俊基を、又いかに聞ゆる事の出で來たるにか、搦めとらむとしければ、内へ逃げて參るを、おひ騷ぎて、陣のほとりまで、武士どもうち込みののしれば、こは何事と聞きわくまでもなし、いともの騷がしく、肝つぶれて、あるかぎり惑ひあへり。うへも物覺え給はぬ御ありさまにて、大殿ごもれるに、かかるよし奏すれば、いみじう思さる。遂に、又の日、六波羅へ遣したれば、あづまへゐて下りぬ。上は、御惱おこたらせ給ひて、いとど安からず思す事まされり。日比も、御心にかけさせ給へる事なれば、速かにこのあらまし遂げてむと、ひたぶるに思し立ちて、忍びてここかしこにその用意すべし。

(一)後醍醐帝御不例

(二)衛府の陣

(三)俊基を

〔二〕后宮の御腹の一品内親王、御占にあはせたまひて、去年の冬頃より、御きよまはりありつる、今日明日、齋宮に居給ふ。八月二十日、まづ河原へ出でさせ給ひて、やがて野の宮に入らせたまふ。その程の事ども、いみじう清らなり。この御いそぎ過ぎぬれば、まづ六波羅を御かうじあるべしとて、かねてより宣旨にしたがへり

(一)御齋戒

(二)齋戒のために籠らせ給ふ假宮

しつはものどもを、しのびて召す。源中納言具行、とりもちて事行ひけり。

〔三〕山の前座主にて、今は大塔の二品法親王尊雲と聞ゆる、いかでならはせ給ひけるにか、弓ひく道にもたけく、大かた、御本性はやりかにおはして、この事をも、おなじ御心に、おきてのたまふ。又中務の親王のひとつ御腹に、妙法院の法親王尊澄と聞ゆるは、今の座主にてものし給へば、かたがた、比叡の山の衆徒も、御門の御軍に加はるべきよし奏しけり。

〔四〕つつむとすれど、事廣くなりにければ、武家にも早う漏れ聞えて、さにこそあなれと用意す。まづ九重をきびしくかため申すべしなど定めけり。かくいふは、元弘元年八月二十四日なり。雜務の日なれば、記録所におはしまして、人の爭ひうれふる事どもを、行ひ暮させ給ひて、人々もまかで、君も本殿にしばしうち休ませ

(一)比叡山の前の天台座主

(二)中務卿尊良親王

(一)人民の貸借賣買等の雜訴を裁斷し給ふ日

(二)常の御所、清涼殿

給へるに、今宵既に武士どもきほひ參るべしと、忍びて奏する人ありければ、とりあへず、雲の上を出でさせ給ふ。中宮の御方へ渡らせ給ひても、しめやかにあらず、いとあわただしかねて思しまうけぬにはあらねども、事のさかさまなるやうになりぬれば、よろづうきうきと、我も人もあきれ居たり。内侍所、神璽、寶劍ばかりをぞ、忍びてゐて渡らせ給ふ。上は、なよらかなる御直衣たてまつり、北の對より、やつれたる女車のさまにて、忍び出でさせ給ふ。かの二條院の昔もかくやと思ひ出でらる。

〔五〕日比の御本意には、まづ六波羅を攻められむまぎれに、山へ行幸ありて、彼處へつはものどもを召して、山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべしとさだめられければ、かの法親王たちも、その御心して、坂本に待ち聞え給ひけれど、今はかやうに事違ひぬれば、あへなしとて、俄に道をかへて、奈良の京へぞ赴かせ

(三)平治の亂に二條帝が女房の裝束で藻壁門から忍び出でさせ給うた事

(一)尊雲、尊澄の兩法親王

給ふ。中務の宮も、御馬にて追ひて參りたまふ。九條わたりまで御車にて、それより、御門も、狩の御衣にやつれさせ給ひて、御馬にたてまつるほど、こはいかにしつる事ぞと、夢の心地して思さる。御供に、按察大納言公俊、萬里小路中納言藤房、源中納言具行、四條中納言隆資など參れり。いづれもあやしき姿にまぎらはして、暗き道をたどりおはする程、げに闇のうつつの心地して、我にもあらぬさまなり。

〔六〕丑三つばかりに、木幡山過ぎさせ給ふ。いとむくつけし。木津といふわたりに御馬とめて、東南院の僧正の許へ御消息つかはす。それより御輿を參らせたるに奉りて、奈良へおはしまし着きぬ。ここに中一日ありて、廿七日、和束の鷲峯山へ行幸ありけれども、そこもさるべくやなかりけむ、笠置寺といふ山寺へ入らせ給ひぬ。所のさま、たやすく人の通ひぬべきやうもなく、よろしかるべしとて、木丸殿のかまへを始めらる。これよりぞ、人々、すこし心地とりしづめて、近き國々の兵ども召しに遣はす。

〔七〕さて、都には、二十四日の夜、六波羅より、常陸守時知馳せ參りて、百敷の中をあさりさわぐ。その程、人の曹司などに、おのづから落ち殘りたる女房の心地、いはむかたなし。おはします殿を見れば、近き御厨子、御調度ども、なにくれ、硯なども、さながらうち散りて、只今までおはしましける跡と見えながら、宮人などだに一人もなし。女房の曹司曹司より、ひすましめく女の童など、我先にと走り出で、調度ども運び騒ぎ、くづれ出づる氣色ども、いとあさましく、目もあやなり。

〔八〕錦の几帳の内にいつかれましましつる后の宮も、何の儀式もなく、忍びてあわて出でさせ給ひぬれば、あたりあたりかき拂ひ、時の間に、いとあさましく、御簾几帳など、踏みしだき、ひき落し

(一)奈良東大寺にある

(二)古今集に、「ぬば玉の闇のうつゝは、さだかなる夢にいくらもまさらざりけり」

(一)樋洗、便器を掃除する下賤のもの

(二)荒木のまゝの宮殿

て、火の影もせず、此處も彼處も暗がりて、うちあれたる心地す。今朝まで、九重の深き宮の中に、出入りつかへつる男女、ひとり留らず、えもいはぬ武士どもうち散り、荒々しげなるけはひに、續松高くささげて、細殿、渡殿、何くれ、(一)まかげさして、あさりたる氣色、けうとくあさまし。世は憂きものにこそと、時の間に、げに、心あらむ人は、やがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺えぬる。中宮は、忍びて、野宮殿の傍にぞおはしまし着きにける。宣房の大納言の二郎季房の宰相ばかり、御宿直に侍ふ。

〔九〕 二十五日の曙に、武士どもみちみちて、御門の親しく召し使ひし人々の家々へ、押し入り押し入り、とりもて行くさま、(二)獄卒とかやの現れたるかと、いと恐ろし。萬里小路大納言宣房、侍從中納言公明、別當實世、平宰相成輔、一度に皆六波羅へゐて行きぬ。かやうの事を見るに、いとど肝心も失せて、おのづからとり殘されたる人も、(三)心と、皆かきけち、行き隱るる程に、主なき宿のみぞ多かる。

〔一〇〕 坂本には、行幸を待ち聞え給ひけるに、引きたがへ、南ざまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなば惡しかりぬべし、又、とまれかくまれ、まことのおはしまし所を、さうなく武家へ知らせじの謀にやありけむ、花山院の大納言師賢を山へ遣はして、忍びて御門のおはします、よしにもてないて、かの(一)兩法親王事行ひたまひつつ、六波羅のつはものどものかこみを防がせたまふ。

〔一一〕 その日は、大納言も、(一)大塔の前座主の宮も、うるはしき武士姿にいでたたせ給ふ。卯花をどしの鎧に、鍬形の兜たてまつり、大矢負ひてぞおはする。(二)妙法院の宮は、すずしの御衣の下に、萌黄の御腹卷とかや着たまへり。大納言は、からの香染の薄物の狩衣に、けちえむに赤き腹卷をすかして、(三)さすがに蒔繪の細太刀をぞ佩

(一)目の上に手をかざすをいふ

(一)地獄で罪人を苛責する惡鬼

(二)自分の心から

(一)尊雲、尊澄の兩法親王

(一)尊雲法親王

(二)今の座主尊澄法親王

(三)それでも御公卿樣だけに

き給ひける。

〔一二〕 六波羅より、御門ここにおはしますと心得て、武士ども多く参りかこむ。山法師も戰ひなどして、海東とかやいふつはもの(一)討たれにけり。事のはじめに、東うせぬる、めでたしなどぞいふめる。かかれども、御門笠置におはしますよし、程なく聞えぬれば、謀られ奉りにけるとて、山の衆徒も、せうせう心がはりしぬ。宮々も(二)逃げ出で給ひて、笠置へぞまうで給ひける。

〔一三〕 大納言は、都へまぎれおはすとて、夜ぶかく、志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月くまなく澄み渡りて、寄せかへる浪の音もさ(一)びしきに、松吹く風の身にしみたるさへ、とりあつめ心細し。

思ふ事なくてぞ見まし、ほのぼのと、
ありあけの月の志賀のうら波。

その後、辛うじてぞ笠置へはたどり参られける。

(一)六波羅方の大將海東左近大夫將監
(二)尊雲、尊澄の法親王方
(一)近江琵琶湖の畔

〔一四〕 かやうの事どもも、例のはや馬にて、あづまへ告げやりぬ。只今の將軍は、昔式部卿久明親王とて、下り給へりし將軍の御子(一)なり。守邦の親王とぞ聞ゆる。相模守高時といふは、病によりて、いまだ若けれど、一とせ入道して、今は世の大事どもいろはねど、鎌倉のぬしにてはあめり。心ばへなども、いかにぞや、うつつなくて、朝夕好むこととては、犬くひ、田樂などをぞ愛しける。これは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時より八代にあたれり。この頃、私の後見には、長崎入道圓基とかやいふものあり。世の中の大小事、只この圓基が心のままなれば、都の大事かばかりになりぬるをも、かの入道のみぞ、とりもちておきて計ひける。重き武士ども多くのぼすべしと聞ゆ。大かた、京も鎌倉も、騒ぎのののしるさまけしからず、承久の昔もかくやと、今更に思ひやらる。

〔一五〕 持明院殿には、春宮おはしませば、思の外にめでたかるべ

(一)後深草の皇子
(二)闘犬
(三)圓基の子左衛門尉高資の誤だらうといふ
(一)後伏見上皇の御所

(二)量仁親王、後に光厳帝
(三)後伏見院
(四)花園院

き事なれど、今日明日は、いまだ軍のまぎれにて、何の沙汰もなし。御宿直の者の、うべうべしきも無くて、離れおはしますも、あぶなき心地すればにや、せめても六波羅近くとて、六條殿へ、本院(三)、新院(四)、春宮、引き續きて遷らせたまひぬれど、日にそへて、天の下さわぎみち、恐しき事のみ聞ゆれば、猶これも危しとて、六波羅の北に、代代の將軍の御料とて造り置ける檜皮屋一つあるに、兩院春宮いらせ給ふ。大方は、いとものしきやうなれど、よろしき時こそあれ、かばかりのきはには、何の儀式も無かるべし。

(一)後醍醐帝の行在所

〔一六〕 笠置殿(一)には、大和、河内、伊賀、伊勢などより、兵ども參りつどふ中に、事のはじめより、頼み思されたりし、楠木兵衛正成といふものあり。心猛く、すくよかなるものにて、河内國に、己が館のあたりを、嚴しくしたためて、このおはします所、若し危からむ折は、行幸をもなし聞えむなど、用意しけり。東のえびすどもも、やうやう

(二)兩六波羅の武士
(一)丸木の御所笠置の行在所

攻め上るよし聞ゆ。もとより京(二)にある武士どもも、我先にときほひ參る。

〔一七〕 木丸殿(一)には、さこそいへ、むねむねしきものなし、いかにな り行くべきにかと、いとものの心細く、思しみだる。我が御心もての御事なれば、かこつかたなけれど、故郷の空も、あはれに思し出でらる。秋も深くなり行くままに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるるも、あたのきほふかと肝を消す御住居、いつしか、御身をかへたる心地し給ふも、あぢきなし。

うかりける身を秋風に誘はれて、
思はぬ山のもみぢをぞ見る。

〔一八〕 既に、東の武士ども、雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にも、いみじう思し騒ぐ。もとよりいと嶮しき山のつづらをりを、えもいはず、木戸、逆茂木、石弓などいふ事どもしたため

らるゝさりとも、たやすくは破れじと、頼ませ給へるに、後の山より、御かたきどもくづれ参りて、木戸ども焼き拂ひ、おはしますあたり近く、既に煙もかかりければ、今はいかがせむにて、あやしき御姿にやつれて、迎り出でさせ給ふ。(一)座主の法親王、御手をひき奉り給へるも、いとはかなげなる御有様なり。

(一)尊澄法親王

〔一九〕(一)中務の御子、(二)大塔の宮などは、かねてよりここを出でさせ給ひて、楠木が館におはしましけり。行幸もそなたざまにやと思し心ざして、藤房、具行両中納言、師賢の大納言入道、手を取りかはして、焔の中を免れ出づる程の心地ども、夢とだに思ひも分かず、いとあさまし。少し延びさせ給ひてぞ、御馬尋ね出でて、君ばかり奉りぬれど、ならはぬ山路に、御心地もそこなはれて、誠にあやふく見えさせ給へば、(三)たかまの山といふわたりに、しばし御心地をためらふ所に、山城國の民にて、深須の五郎入道とかいふもの参

(一)尊良親王
(二)尊雲法親王

(三)山城多賀村の邊で、「たかま」の「ま」は衍文、「たかの山」とあるべきかといふ

りかかりて、案内聞えたるしも、いとめざましう、口惜し。上達部、思ひやる方なくて、只目を見かはして、いかさまにせむとあきれたるに、東より上れる大將軍にて、陸奥國の守貞直といふもの、大勢にて参れり。今はただ、ともかくものたまはすべきやう無ければ、遂にかひなくて、敵のために御身を任せぬるさまなり。

〔二〇〕やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらで、ひかされおはしますに、心憂しといふもなのめなり。具行、藤房、忠顯少將など、やがておのが手の者どもに隨へさせつ。(一)大納言入道、御馬のしりに走り後れて、此處彼處の岩蔭、木のもとに休みつつ、とかくためらふ程に、それも見つけられて、とられぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事のよし六波羅へきこゆる程、一二日御逗留あり。かくいふは九月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに、涙もよほしがほなり。(二)平等院の紅葉御覽じやらるるも、かか

(一)師賢

(二)宇治にある

らぬ行幸ならばと、あへなし。後冷泉院かとよ、ここに行幸し給ひて、三四日おはしましける、その世の人の心地、上下、何事かはと、羨しくあはれに思さる。

〔二一〕 十月三日、都へ入らせ給ふも、思ひしにかはりて、いとすさまじげなる武士ども、衛府のすけの心地して、御輿近くうち圍みたり。鳳輦にはあらぬ、網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより、兩院春宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなどして、おはしまさするも、いとほしう、かたじけなし。間近きほどに、よろづ聞しめし、御覽じふるる事々につけても、いかでか御心動かぬやうはあらむ。口惜しう思しみだる。ならはぬ御やどりに、時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨、
音を聞くにも濡るる袖かな。

(一)近衛の中少將、兵衛、衛門の佐官で、行幸に供奉する官人

第十九　久米のさら山

〔一〕 元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年のはじめには、思ひなしさへ花やかなり。上も若う清らにおはしませば、よろづめでたく、百敷の内、何事も變らず。さるべき公事のをりをり、さらでも、院内同じ陣の中なれば、一つに立ちこみたる馬車、隙なくにぎはしけれど、見し世の人は、一人もまじろはず、參りまかづる顔のみぞかはれる。

〔二〕 先帝は、いまだ六波羅におはします。二月の頃、空の氣色、のどやかにかすみわたりて、ゆるらかに吹く春風に、軒の梅なつかしくかをり來て、鶯の聲うららかなるも、うれはしき御心地には、もの宮の中思ひよそへらる。ながき日影も、いとど暮し難き御なぐ

(一)光嚴帝

(二)仙洞と内裏とが同じ衛府の陣の中にある

(一)後醍醐帝

(二)白氏文集新樂府に「上陽白髪人」とい

ふのがある、上陽宮中に閉せられた後宮人の春日獨坐鶯を聞いて悲む趣

さめにとや聞え給ひけむ、中宮より御琵琶奏らせ給ふついでに、いささかなる物のはしに、

思ひやれ、ちりのみつもる四の絃に、
はらひもあへずかかるなみだを。

げにと思召しやるに、いと悲しくて、玉水の流るるやうになむ。御かへし、

かきたてし音をたちはてて、君戀ふる
なみだのたまの緒とぞなりける。

(一)承久の亂に三上皇を遠島に遷し奉つた例

〔三〕かの承久のためしにとや、東よりの御使には、長井の右馬助高冬といふものなるべし。これは頼朝の大將の時より、鎌倉におもき武士にて、いまだ若けれども、かかる大事にも上せけるとぞ申しける。遂に隱岐國へ遷し奉るべしとて、三月のはじめの七日に、都を出でさせたまふ。今はと聞しめす御心まどひども、いへば

さらなり。所々の歎き、近う仕りし人々の心地ども、おき所なく、悲し。

(一)過ぎた承久の昔の事

〔四〕御門も、限りなく御心惱むべし。いとかうしも人に見えじと、かつは思ししづむれど、あやにくにすすみ出づる御涙を、もてかくしつつおはします。ふりにし事を思し出づるにも、立ちかへり、また世をやすく思さむ事の、いとかたければ、よろづ今をとぢめにこそと、思しめぐらすに、人やりならず、口惜しきちぎり加はりける前の世のみぞ、つきせず恨めしき。

つひにかく沈みはつべき報あらば、
上なき身とはなにうまれけむ。

(二)最高最上の身、卽ち天子の意

〔五〕巳の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に、御前どもなどは、故院の御世より仕う奉りなれにし者ども、ある限り參れり。御車寄に、西園寺中納言公重さぶらひ給ふ。うへは、御冠に、世のつね

(一)後宇多院

の御直衣、指貫、白綾の御衣一かさね奉れり。去年の今日は、北山にて花の宴せさせ給ひしも、あはれに思し出でられて、その日の事、かきつらね戀しくおぼさる。人々の祿にこそは賜はせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、あはれに、定めなき世のならひ、今さら心うし。御車に奉るとて、日比おはしましつる傍の障子に、書きつけさせたまふ。

いさ知らず、なほうき方の又もあらば、

このやどとてもしのばれやせむ。

〔六〕御供には、内侍の三位殿、大納言君、小宰相など、男には、行房の中將、忠顯の少將ばかりつかまつる。おのがじし、都の名殘ども、いひ盡しがたし。六波羅よりの御おくりの武士、さならでも名あるつはものども、千葉介貞胤を始めとして、おぼえことなる限り、十人選びて奉る。いろいろの綾錦の水干、直垂などいふもの、さまざまに織りつくし、染めつくして、いみじき清らを好みととのへたれば、かくてしも、世に珍しき見物なり。六波羅より、七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門前に御車おさへらる。とばかり御念誦あるべし。物見車ところせきほどなり。よろしき女房も、壺裝束などして、かちの者どももうちまじれり。わかきも、老いたるも、尼法師、あやしき山がつまで、立ちこみたるさま、竹の林に異ならず。おのおの目押しぬぐひ、鼻すすりあへるけしきども、げにうき世のきはめは今に盡しつる心地ぞする。

〔七〕崇德院の讃岐におはしましけむ程のありさま、後鳥羽院の隱岐に遷らせ給ひけむ時なども、さこそはありけめなれど、つてにのみ聞きて、見ねば知らず。これを始めたる心地ぞする。日比は、何の御にほひにもふれず、數ならぬ人、及ばぬ身までも、今日の御別のあはれさ、なべて、おき所なげにぞ、惑ひあへるかし。君も、御簾

(一)六波羅より差遣の武士以外でも
(二)狩衣の略製のもの

少しかきやりて、このもかのも御覽じわたしつつ、御日とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どもも、しほとけげにぞ見ゆる。都の梢を、かくるるまで御覽じおくるも、猶夢かと覺ゆ。鳥羽殿におはしましつきて、御よそひあらため、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてまゐらず。これより御輿にたてまつれば、留るべき御前どもの、空しき御車を、泣く泣くやりかへるとて、くれまどひたる氣色、いと堪へ難げなり。

〔八〕 かくて君は遙かに赴かせ給ふ。淀のわたりにて、むかし八幡の行幸ありし時、橋わたしの使なりし佐々木の佐渡の判官といふもの、今は入道して、今日の御おくり仕れるに、その世の事思し出でられて、いと忍びがたさにたまはせける、

しるべする道こそあらずなりぬとも、
よどのわたりはわすれしもせじ。

(一)菅公筑紫下向の時の詠に「君が住むやどの梢をゆくゆくもかくるるまでにかへり見しはや」

(二)正中元年三月二十三日石清水八幡宮行幸

〔九〕 又の日は、中務のみこ、土佐の國へおはします。御供に爲明中將まゐる。日比かくあやしき御やどりにものし給ふを、辱く思ひ聞えつるに、遙かなる世界にさへゐておはしませば、まして、いかさまなるわざをして御覽ぜさせむと、あるじ時信、けいめいしさわぐ。宮既にたたせ給ふとて、瓶にさしたる花を折らせ給ひて、

花はなほとまる主にかたらへよ、
われこそ旅にたち別るるとも。

同じ日、やがて、妙法院の座主尊澄法親王も、讃岐國へおはします。

〔一〇〕 先帝は、今日、津の國こや野の宿といふ所に着かせ給ひて、夕づく夜ほのかにをかしきをながめおはします。

命あれば、こやの軒端の月も見つ、
またいかならむ、行末のそら。

こや野より出でさせたまひて、武庫川、神崎、難波、住吉など過ぎさ

(一)尊良親王

(二)賤しい御宿所、主人時信自身の家を指す

(一)後醍醐帝

せ給ふとて、御心のうちに思す筋あるべし。(二)廣田の宮のわたりにても、御輿とどめて、拜み奉らせ給ふ。

〔一一〕　あしやの里、すずめの松原、布引の瀧など、御覽じやらるるも、ふるき御幸どもおぼし出でらる。生田の森をば、とはで過ぎさせたまひぬめり。湊川の宿につかせ給へるに、中務宮は、こやの宿におはします程、間近く聞き奉らせ給ふも、いみじう哀に悲し。宮、いとせめてうき人やりの道ながら、

おなじとまりと聞くぞ嬉しき。

福原の島より、宮は御船にたてまつる。

〔一二〕　御門は、和田の岬、刈藻川をうちわたして、須磨の關にかからせ給ふ。かの行平の中納言、(一)「關ふきこゆる」といひけむは、浦よりをちなるべし。あはれに御覽じ渡さる。源氏の大將の、(二)「なく音にまがふ」と宣ひけむ浦浪、今もげに、御袖にかかる心地するも、さまざ

(一)後三條帝の跡を追つて後嵯峨院が天王寺住吉等に御參詣のあつた事などを指す

(二)攝津武庫郡にあつて、天照大神の荒魂を祀る

(一)續古今集に「旅人は袂涼しくなりにけり、關吹きこゆる須磨の秋風」

(二)源氏物語須磨の卷に「戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は、思ふ方より風や吹くらむ」

ま御涙のもよほしなり。播磨の國へ着かせ給ひて、鹽屋、垂水といふ所、をかしきを、問はせたまへば、さなむと奏するに、「名を聞くよりからき道にこそ」と宣はせて、さしのぞかせ給へる御さまかたち、ふりがたく、なまめかしげぢかきかぎりは、あはれにめでたうもと、思ひ聞ゆべし。

〔一三〕　大くら谷といふ所、少し過ぐる程にぞ、人麿のつかはありける。明石の浦を過ぎさせ給ふに、(一)島隱れ行く船ども、ほのかに見えてあはれなり。

水の泡の消えてうき世を渡る身の、
うらやましきはあまのつり船。

〔一四〕　野中の清水、ふたみの浦、高砂の松など、名ある所々、御覽じわたさるるも、かからぬ御幸ならば、をかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御みだり心地に、御目とまらぬも、我ながらい

(一)古今集羇旅に「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島隱れゆく舟をしぞ思ふ」

たうくむじにけるかなと思さる。(一)いと高き山の峯に、花面白く咲き續きて、白雲をわけ行く心地するも艶なるに、都の事數々思し出でらる。

花はなほうき世もわかずさきてけり、
みやこもいまやさかりなるらむ。
あと見ゆるみちのしをりのさくら花、
このやまびとのなさけをぞ知る。

(一)明石の大寺山などを指したものかといふ

〔一五〕十二日に、加古川の宿といふ所におはします程に、(二)妙法院宮、讃岐へ渡らせ給ふとて、同じ道、少しちがひたれど、この川の東、野口といふ所まで參り給へるよし、奏せさせ給へば、いとあはれに、相見まほしう思さるれど、御送のつはものども、ゆるし聞えねば、宮空しく歸らせ給ふ御心のうち、堪へがたく、亂れまさるべし。さらなる事なれど、かばかりの事だに、御心に任せずなりぬる世

(一)尊澄法親王

の中、いへばえに、つらく恨めしからぬ人なし。

〔一六〕十七日、美作の國におはしまし着きぬ。御心地なやましくて、この國に、二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御やどりなれば、もの深からで、候ふかぎりの武士ども、おのづからけ近く見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君も思しつづくる事ありて、

あはれとは汝も見るらむ、我が民と
おもふこころはいまもかはらず。

おはしますに續きたる軒のつまより、煙の立ち來れば、(一)「いほりにたける」とうち誦ぜさせ給へるも艶なり。

よそにのみ思ひぞやりし、思ひきや、
たみのかまどをかくて見むとは。

〔一七〕かくて、なほおはしませば、來し方はそこはかとなく霞み

(一)源氏物語須磨の卷に「山がつの庵にたけるしばしばもことととひ來なむ戀ふる里人」

わたりて、あはれに遠くも來にけるかな」と、日數にそへて、都のいとど隔たりはつるも、心細う思さるほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ、日數も山も重なるにそへて、うつろひまさりつつ、上り下るつづらをりに、いと白く散り積りて、むら消えたる雪の心地す。

花の春また見むことの難きかな、
おなじ道をばゆきかへるとも。

いと難しとは思すものから、猶さりとも、平かにだにあらば、おのづから御本意遂ぐるやうもありなむなど、御心もて慰め思すもはかなし。

〔一八〕久米のさら山といふ所越えさせ給ふとて、

聞き置きし久米のさら山越えゆかむ
道とはかねておもひやはせし。

逢坂といふは、東路ならでもありけりと聞しめして、

立ち歸り越えゆく關と思はばや、
みやこにききしあふさかの山。

三日月の中山にて、昔後鳥羽院の仰せられけむ事、思し出づるさへ、げにうかりけるためしなり。

傳へきく昔がたりぞ憂かりける、
その名ふりぬるみかづきの森。

〔一九〕御道なかばになりぬれば、御送のものども、上下、都出でしよりも、なほ花やかに、今めかしう、さうぞきかへたり。大方は、あやしう、さまことなる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國々に心づかひしたる氣色などは、かうざまの御ありきとは見えず、いとやむごとなくなむ。さはいへど、今まで國のあるじにて、世をもいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらむ、いとねむごろにのみ

(一)承久軍物語に「都人たれふみそめて通ひけむ、むかひの道のなつかしきかな」

仕うまつれり。古への御幸どもには、かやうはあらざりけりとぞ、古き事知れる人々いひ侍りける。四月一日の頃、百敷の宮の中思し出でられて、

さもこそは月日もしらぬ我ならめ、
衣がへせし今日にやはあらぬ。

〔二〇〕 出雲國やすぎの津といふところより、御船にたてまつる。大船二十四艘、小船どもは、數知らず續きたり。遙におし出すほど、今一かすみ、心細うあはれにて、誠に二千里の外の心地するも、今さらめきたり。かの島におはしましつきぬ。昔の御跡は、それとばかりのしるしだになく、人のすみかもまれに、おのづから、蜑の鹽やく里ばかりはるかにて、いとあはれなるを御覽ずるにも、御身の上はさしおかれて、まづかの古への事思し出づ。かかる所に世をつくし給ひけむ御心のうちいかばかりなりけむと、哀に、かたじけなくおぼさるるにも、「今はた更にかくさすらへぬるも、何により思ひたちし事ぞ。かの御心の末やはたし遂ぐると思ひし故なり。苔の下にもあはれと思さるらむかし」と、よろづにかき集め、盡きせずなむ。

〔二一〕 海づらよりは少し入りたる、國分寺といふ寺を、よろしき樣にとり拂ひて、おはしまし所に定む。今はさは、かくてあるべき御身ぞかしと、思ししづまる程、猶夢の心地して、いはむ方なし。そこら參りし武士共も、まかづれば、かいしめり、のどやかになりぬる、いとど心細し。昔こそ、受領どもも、任のほど、その國をしたため行ひしか。この頃は、只名ばかりにて、何處にも、守護といふものの、目代よりはおぞましきを据ゑたれば、武家のまびきにてのみ、おほやけざまの事は、よろづおろそかにぞしける。葛城の大君を陸奥國へ遣したりけむも、かくやと、あはれなり。

(一)主として後鳥羽院の御幸などを指す
(一)白樂天の「三五夜中新月色、二千里外故人心」
(二)後鳥羽院のいらせられた御跡
(三)後鳥羽院の御事
(一)目付を窺つてその意に從ふこと
(二)葛城王を陸奥へ遣はされた時國司が冷遇して王が怒り給うた事、萬葉集に見えてゐる

〔二二〕 かしこに參り給へる内侍三位の御腹にも、御子たち數多おはします。何れも、いまだいわけなき御程にはあれど、物思し知りて、いみじう戀ひ聞え給ひつつ、をりをりは、忍びてうち泣きなどし給ふ。稚うものし給へば、遠き國までは遷し奉らねど、もとの御後見をば改めて、西園寺大納言公宗の家にぞ渡し奉る。八になり給ふぞ、御このかみならむかし。北山におはするほど、夕暮の空、いと心すごう、山風あららかに吹きて、常よりも物悲しく覺されければ、

(一)庭松綠老秋風冷。菌竹葉繁白雪埋。

つくづくとながめくらして、入相の
かねのおとにも君ぞ戀ひしき。

稚き御心にも、はかなくうちひそみ給へる、いと哀なり。ここもかしこも、盡きせず思し歎くさま、いはずとも皆推し量るべし。

(一)古人の詩句と考へられるが、出典は明かでない

〔二三〕 花山院大納言師賢は、千葉介貞胤うしろみて、下總國に下る。五月十日あまりに、都出でられけり。思ひかけざりし有樣ども、いみじともさらなり。

別るともなにか嘆かむ、君すまで、
憂きふる里となれるみやこを。

〔二四〕 源中納言具行も、おなじ頃、東へゐて行く。あまたの中に、とりわきて重かるべく聞ゆるは、さまことなる罪にあたるべきにやあらむ。中納言は、「ものにもがなや」(一)と、くやしう、はしたなき事のみぞ、底にはちぢに碎くめれど、めめしう人に見えじと思ひかへしつつ、つれなく作りて、思ひ入りぬるさまなり。去年の冬頃、あまた聞えし歌の中に、

ながらへて、身はいたづらに初霜の
置く方知らぬ世にもふるかな。

(一)源氏物語河海抄帚木卷の引歌に「とりかへす物にもがなや、世の中をありしながらの我が身と思はむ」

今ははやいかになりぬる憂身ぞと、
おなじ世にだに問ふ人もなし。

(一)具行卿を

〔二五〕佐々木佐渡判官入道、(一)伴ひてぞ下りける。逢坂の關にて、
歸るべき時しなければ、これやこの
行くをかぎりのあふさかの關。

柏原といふ所に、暫しやすらひて、あづかりの入道、まづ東へ人を遣したる、返事待つなるべし。その程、物語など、なさけなさけしう、うちいひかはして、「何事もしかるべき前の世の報いに侍るべし。御身一つにしもあらぬ身なれば、ましてかひなきわざにこそ。かくたけき家に生れて、弓箭とるわざにかかづらひ侍るのみ、うきものに侍りけれ」など、まほならねど、ほのめかすに、心えはてられぬ。

(二)御一身だけでなく他の黨類にも關する御身の上だからの意

(一)後醍醐帝隱

〔二六〕(一)隱岐の御送りをもつかまつりしものなれば、御道すがら

岐御遷幸の御送り

の事など語り出でて、「かたじけなう、いみじうも侍りしかな。まして、朝夕近う仕う奉りなれ給ひけむ御心ども、さながらなむ推し量り聞えさせ侍りし。何事も、昔に及び、めでたうおはしましし(二)御事にて、世下り、時衰へぬる末には、あまりたる御ありさまにや、かくもおはしますらむとさへ、せめては思ひたまへよらるる」など、大方の世につけても、げにと覺ゆるふしぶし加へて、のどやかにいひをるけはひ、おのがほどにはすぎにたる御酒など、所につけて、ことそぎあらしけれど、さる方にしなして、よきほどにて、くだしつる東よりの使、歸り來たるけしきしるけれど、ことさらにいひ出づる事もなし。いかならむと、胸うちつぶれて覺ゆるも、かつはいと心弱しかし。

(二)御方にての意

(一)具行卿の心中

〔二七〕(一)「いづくの島守となれらむ人も、あぢきなく、たれも千年の松ならぬ世に、なかなか心づくしこそまさらめ。遂に遁るまじき

道は、とてもかくてもおなじ事、そのきはの心亂れなくだにあらば、すずしき方にも赴きなむ」と、おもふ心は心として、都の方も戀しう、あはれにさすがなる事ぞ多かりける。

(二)極樂淨土

〔二八〕 よろづにつけて、事の氣色を見るに、行末遠くはあるまじかめりとさとりぬ。あづかりがほのめかししも、情ありて思ひ知らすれば、同じうはと思ひて、又の日、「頭おろさむとなむ思ふ」といへば、「いとあはれなる事にこそ。東の聞えやいかがと思ひ給ふれど、なむでふことかは」とて、ゆるしつ。かくいふは、六月の十九日なり。

(一)警固の道譽入道

〔二九〕 かの事は今日なめりと、氣色見知りぬ。思ひまうけながらも、猶ためしなかりける報いのほど、いかが淺くはおぼえむ。

(一)自分の殺される事

消えかかる露の命のはては見つ、
さてもあづまの末ぞゆかしき。

猶も思ふ心のあるなめりと、憎き口つきなりかし。その日の暮つかた、終にそこにて失はれにけり。今はのきはも、さこそ心の中はありけめど、いたく人わろうもなく、あるべき事ども思へるさまになむ見えける。内侍の待ち聞く心地、いかばかりかはありけむ。

(二)勾當の內侍具行卿の北の方

やがてさまかへて、近江國高島といふわたりに、昔のゆかりの人人、尊く行ひて住む寺にぞたち入りぬる。

〔三〇〕 萬里小路中納言藤房は、常陸國につかはさる。父の大納言、母おもとなど、老の末に、引き別るる心地ども、いへばさらなり。身にかへてもとどめまほしう思へど、かひなし。弟の季房の宰相も、頭おろしたりしかど、猶下野國へ流さる。平宰相成輔は、東へと聞えしかど、それも駿河國とかやにて失はれける。

(一)公卿補任には、元弘二年五月二十二日伊豆早川宿で梟首とある

〔三一〕 又、元享の亂のはじめに流されし資朝の中納言をも、未だ佐渡の島に沈みつるを、この程のついでに、かしこにて失ふべき

よし、あづかりの武士に仰せければ、この由を知らせけるに、思ひ設けたるよしいひて、都にとどめける子の許に、あはれなる文かきてあづけけり。既に斬られけるときの頸とぞ聞き侍りし。

四大本無主、五蘊本來空。將頭傾白刃、但如鑽夏風。

いと哀にぞ侍りける。(一)俊基も同じやうにぞ聞えし。

〔三二〕　かくのみ、皆様々に罪にあたり、遠き世界にはなち捨てらるる、おのおの思ひ歎けども、筆にも及び難し。大塔の尊雲法親王ばかりは、虎の口を遁れたる御さまにて、ここかしこさすらへおはしますも、安き空なく、いかで過しはつべき御身ならむと、心苦しく見えたり。

〔三三〕　(一)隱岐の小島には、月日經るままに、いと忍びがたう思さる事のみぞ數添ひける。いかばかりのおこたりにて、かかるうきめを見るらむと、前の世のみつらく思し知らるるにも、いかでそ(二)の事をも報いてむと思して、打ちたえて、御いもひにて、朝夕勤め行はせたまふ。法のしるしをも試がてらと、かつは思すなるべし。自ら護摩などもたかせ給ふに、いと頼もしき事、夢にも現にも多くなむありける。

〔三四〕　つれづれに思さるる折々は、廊めぐる所に立ち出でさせ給ひて、遙に浦のかたを御覽じやるに、あまの釣船ほのかに見えて、秋の木の葉の浮べる心地するも、あはれに、「いづくをさしてか」と思さる。

心ざす方を問はばや、浪のうへに
うきてただよふあまの釣船。

(一)「浦こぐ船のかぢを絶え」とうち誦じて、御涙のこぼるるを、何となく紛はし給へる、いふよしなく、心深げなり。ねび給ひにたれど、なまめかしう、をかしき御さまなれば、所については、ましてやむご

(一)常樂記に、六月三日武藏國クズ原で誅せられたとある

(一)後醍醐帝の御事を申す

(二)深い前世の罪障

(一)續古今集、小野小町の歌に「須磨のあまのうら漕ぐ舟のかぢをた

え、よるべなき身ぞ悲しかりけり」

(一)光嚴帝御即位についての御儀式

(二)隱岐

となきあたらしさを、自らいとかたじけなしと思さる。

〔三五〕　京には、十月になりて、御禊大嘗會などのいそぎに、天の下物さわがしう、内藏寮、内匠寮、うち殿、染殿、何くれの道々につけて、かしがましうひびきあひたるも、片つ方は、涙のもよほしなり。悠紀主基の御屏風の歌、人々に召さる。書くべきもののなければ、かしこへ參れる行房中將をや召しかへされましなど、定めかね給ふを、まだきに傳へ聞しめしければ、夜居の間のしづかなるに、御前に、ことに人もなく、この朝臣ばかりさぶらひて、昔今の御物語したまふついでに、「都にいふなる事は、いかがあらむとすらむ。さもあらば、いとこそ羨しからめ」と、うち仰せられて、火をつくづくとながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれど、いたうしぐれさせ給へるを見奉るに、中將も、心づよからず、いと悲し。

(一)行房中將の心事

〔三六〕　「いかばかりの道ならば、かかる御有樣を見おき聞えながら、うきふる里にはいかで歸らむ」と思ふも、え聞えやらず。後夜の御行に、さながらおはしませば、潮風いと高う吹きくる、霰の音さへ堪へ難く聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて、閼伽たてまつるも、山寺の小法師ばらなどの心地ぞするや。少將、この中將など、樒折りて參れるも、何時ならひてかと、哀に御覽ぜらる。今一度、いかで世を御心にまかするわざもがなと、人の心のけぢめわかるるにつけても、深う思しまさる事のみ數しらず。

(二)忠顯
(三)行房

〔三七〕　まことや、この卯月の頃より、年の名かはりしぞかし。正慶とぞいふなる。大塔の法親王、楠木の正成などは、猶同じ心にて、世を傾けむ謀をのみめぐらすべし。正成は、金剛山千早といふ所に、いかめしき城をこしらへて、えもいはず武きものども多く籠り居たり。さて大塔の宮の令旨とて、國々の兵をかたらひければ、世にうらみある者など、ここかしこに隱ろへばみてをるかぎりは、

(一)尊雲法親王
(二)河内國石川郡の東南に聳えた山

あつまりつどひけり。

〔三八〕 (一)宮は、熊野にもおはしましけるが、大峯を傳ひて、吉野にも、高野にも、おはしまし通ひつつ、さりぬべきくまぐまには、よく紛れものし給ひて、たけき御ありさまをのみ顯し給へば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、附き隨ひ聞ゆるもの、いと多くなり行きければ、六波羅にも、東にも、いと安からぬ事と、もてさわぎて、猶かの千早を攻め崩すべしと云へば、つはものなど上りかさなると聞ゆ。

(一)大塔宮尊雲法親王

〔三九〕 正成は、(一)聖德太子の御堂の前を軍のそのにして、出で合ひかけひき、寄せつ返しつ、潮のみちひく如くにて、年はただ暮れに暮れ果てぬれば、春になりて、事どもあるべしなどいひしろふも、いとむづかしう、心ゆるびなき世のありさまなり。

(一)太子の舊蹟たる天王寺をいふ

〔四〇〕 さても、日野大納言俊光といひしは、文保の頃、始めて大納言になりにしを、いみじき事に、時の人いひ騷ぐめりしに、その子、この頃、(一)院の執權にて、資名といふ、また大納言になりぬ。めでたく、度をさへ重ねぬる、いといみじかめり。(二)さきの御代にも定房一品し、宣房大納言になされなどせしをば、かうざまにぞ、人思ひいふめりし。

(一)院中の萬事を管理する役

(二)後醍醐帝の御代

第二十　月草の花

〔一〕 (一)かの島には、春來ても、なほ、浦風さえて、浪荒く、渚の氷もとけがたき世のけしきにいとど思しむすぼるる事つきせず、かすかに心細き御すまひに、年さへ隔りぬるよと、あさましく思さる。候ふ人々も、しばしこそあれ、いみじくくむじにたり。

〔二〕 今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後のきさらぎの初めつ方より、とりわきて、密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿ごも

(一)隱岐の島、後醍醐帝の御事を申す

らぬ日數へて、さすがに、いたうこうじ給ひにけり。心ならず、まどろませ給へる曉方、夢現ともわかぬ程に、後宇多院、ありしながらの御面影、さやかに見え給ひて、聞え知らせ給ふこと多かりけり。うちおどろきて、夢なりけりと思すほど、いはむ方なく名殘かなし。御涙もせきあへず、「さめざらましを」(一)とおぼすも、かひなし。源氏の大將、須磨の浦にて、父御門見奉りけむ夢の心地し給ふも、いとあはれに、頼もしう、いよいよ御心強さまさりて、かのしぼちが御(二)むかへのやうなる釣船も、たより出で來なむやと、待たるる心地し給ふに、大塔の宮よりも、あま人のたよりにつけて、聞え給ふ事絶えず。

〔三〕都にも、猶世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思し慰めて、關守のうち寢るひまをのみうかがひ給ふに、しかるべき時の到れるにや、御垣守にさぶらふつはものどもも、御氣

(一)古今集、小野小町の歌に「思ひつゝぬればや人の見えつらむ、夢と知りせばさめざらましを」
(二)源氏物語明石の卷に見ゆ
(三)新發意、明石入道のこと
(一)伊勢物語に「人知れぬ我が通ひ路の關守は、宵々毎にうちも寢ななむ」

色をほの心えて、靡きつかうまつらむと思ふ心つきにければ、さるべき限り語らひ合せて、同じ月の二十四日のあけぼのに、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。いとあやしげなる蜑の釣船のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれにおし出だす。折しも、霧いみじうふりて、行くさきも見えず。いかさまならむと危けれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすすみて、その日の申の時に、出雲の國に着かせ給ひぬ。ここにてぞ、人々心地しづめける。

〔四〕同じ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所へ遷らせたまへり。この國に、奈和の又太郎長年といひて、あやしき民なれど、いとまうに富めるが、類ひろく、心もさかさかしく、むねむねしきものあり。彼がもとへ宣旨を遣し給ひたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず、五百餘騎の勢にて、御迎にまゐれり。又の日、賀茂の社

(一)京都の賀茂上下の社
(二)伯耆國船上山にある智積寺の事だらうといふ

といふ所に、たち入らせたまふ。(一)都の御社思し出でられて、いと頼もし。それより船上寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。これよりぞ、國々のつはものどもに、御敵を亡すべきよしの宣旨遣はしける。比叡の山へものぼらせられけり。(二)

(一)隱岐の守護佐々木清高

〔五〕 かくて、隱岐には、出でさせ給ひにし晝つ方より、騷ぎあひて、隱岐の前の守追ひて參るよし聞ゆれば、いとむくつけく思されつれど、ここにも、その心して、いみじう戰ひければ、引き返しにけり。京にも、東にも、驚き騷ぐさま、思ひやるべし。正成が城の圍みに、そこらの武士ども、かしこに集ひをるに、かかる事さへ添ひにたれば、いよいよ東よりも上り集ふめり。

〔六〕 三月にもなりぬ。十日あまりのほど、俄に世の中いみじうのしる。何ぞと聞けば、播磨の國より、赤松なにがし入道圓心とかやいふもの、先帝の勅に從ひて、攻め來るなりとて、都の中あわて

(一)光嚴帝行幸
(二)後伏見、花園の兩院

まどふ。例の六波羅へ行幸なり、(一)兩院も御幸とて、上下、たち騷ぐ。馬車走りちがひ、武士どものうち込みののしりたるさま、いと恐し。(二)されど、六波羅の軍强くて、その夜は、彼の者ども引き返しぬとて、少し靜まれるやうなれど、かやうにいひ立ちぬれば、御心ゆるびなきにや、そのまま、院も御門もおはしませば、春宮も、離れ給へる、よろしからぬ事とて、二十六日、六波羅へ行啓なる。(三)內の大臣、御車にまゐりたまふ。傳は久我の右の大臣にいますれど、大かたの儀式ばかりにて、よろづこの內大臣御後見つかまつり給へば、いまだきびはなる御程をうしろめたがりて、宿直にも、やがて候ひ給ふ。御修法のために、法親王たちも候はせ給へり。

(三)內大臣通顯

〔七〕 ここもかしこも、軍とのみ聞えて、日數經るに、院よりの仰せとて、上達部、殿上人までも、ほどほどに隨ひてつはものを召せば、弓ひく道もおぼおぼしき若侍などをさへぞ奉りける。げにひぢ(一)

(一)白氏文集新

樂府にある折臂翁の故事、出征を避けるために自ら臂を折つたといふ話

(一)後暗くの意の特義の例

(一)賴義の後三代目の義康が足利を名乗りそれより八代目に當る

折りぬべき世の中なり。かやうにいひしろふ程に、三月も暮れぬ。

〔八〕卯月の十日あまり、又あづまよりもののふ多く上る中に、一昨年笠置へも向ひたりし、足利の治部大輔源高氏のぼれり。院にも賴もしく聞しめして、かの伯耆の船上へ向ふべきよし、院宣たまはせけり。東を立ちし時も、(一)うしろめたく、二心あるまじきよし、おろかならず誓言文を書きてけれども、底の心やいかがあらむ、とかく聞ゆるすぢもありけり。

〔九〕この高氏は、古への賴義朝臣の名殘なりければ、もとの根ざしは、やむごとなき武士なれど、承久よりこのかた、頭さし出す源氏もなくて、うづもれ過しながら、類ひろく、勢四方にみちて、國々に心よせのもの多かれば、かやうの國の危き折をえて、思ひたつ道もあらむなど、下にさざめくもしるくぞ見えし。伯耆國へ向ふべしといひなして、まづ西山大原わたりに一とまりして、五月七日、ほのぼのと明くるほどより、大宮の木戸どもを押開きて、二條より下、七條の大路を東ざまに、七手に分れて、旗をさし續けて、六波羅をさして、雲霞の如くたなびき入るに、更におもてをむかふるものなし。この治部大輔、はやうより先帝の勅を承りてければ、

(二)後醍醐帝

さかさまに都を亡さむとするなりけり。

〔一〇〕鬨つくるとかやいふ聲は、雷の落ちかかるやうに、地の底もひびき、梵天の宮の中も聞き驚き給ふらむと思ふばかり、とよみあひたるさま、來しかた行くさきくれて、物覺ゆる人もなし。御門、春宮、院のうへ、宮たちなど、まして一人さかしきもおはしまさず。絲竹のしらべをのみ聞し召しならひたる御心どもに、めづらかに疎ましければ、ただあきれ給へり。武士ども、半をわけて、金剛山へむかひたれば、さならぬ殘り、都にあるかぎりは、戰をなす。今をかぎりの軍なれば、手をつくしてのしる程、まねびやらむ方

(一)三十三天の中宮の帝釋の居處

なし。雨の脚よりも繁く走りちがふ矢にあたりて、目の前に死をうくるもの、數を知らず。一日一夜いりもみとよみ明かすに、兩六波羅にも、殘る手なく防ぎつれど、遂に陣の内破られて、今はかくと見えたり。

〔一一〕　日比さぶらひ籠り給へる上達部、殿上人なども、今日と思ひ設けたらむだに、君のおはしまさむ限りは、いかでかまかでも散らむ。まして、かねてよりかく構へけるをも知しめさで、昨日かとよ、當代の宣旨を賜りしものの、かくうらがへりぬれば、誰か思ひ寄らむ。すべて、上下となく、一つに立ち込みて、あわて惑ひたり。

〔一二〕　日暮し、八幡、山崎、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺など、燃えあがる煙ども、四方の空にみちみちて、日の一光も見えず、墨を磨りたるやうにて暮れぬ。ここにも火かかりて、いとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣を、辛うじて破りて、それより免れ出で

(一)高氏が四月十六日に伯耆に向ふべき院宣を受けたのをいふ

(一)六波羅

させ給ふ御心地ども、夢路を辿るやうなり。内のうへも、いとあやしき御姿に、ことさらやつし奉る、いとまがまがし。兩院も、御手をとりかはすと云ふばかりにて、人に扶けられつつ、出でさせ給ふ。上達部、大臣たちは、袴のそばとりて、冠などの落ちゆくも知らず、空をあゆむ心地して、あるは河原を西へ東へ、さまざまちりぢりになりたまふ。

〔一三〕　伯耆の御所へは、人々まゐりつどふ。上達部、殿上人、數しらず。さるほどに、東にも、かねて心えけるにや、高氏のすゑの一族なる新田小四郎義貞といふもの、今の高氏の子、四になりけるを大將軍にして、武藏國より軍をおこしけり。この頃の東の將軍は、守邦親王にておはします。御後見つかまつる高時入道、貞顯入道、城介入道圓明、長崎入道圓基などいふものども、驚き騷ぎて、高時入道の弟に、四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ、大將

(一)光嚴帝

(二)後伏見院、花園院

(一)後醍醐帝の御所

(二)足利義詮をいふ

(三)前將軍久明親王の御子

に下しける。五月十四日、鎌倉を立ちて向ふ。その勢十萬餘騎。高時入道の一族、附き隨ふもの、そこら滿ちひろごりて、鎌倉始まりし頼朝の世、時政より今に至るまで、多くの年月をつめり、僅なる新田などいふ國人に、たやすく、いかでかは亡さるべきと覺えしに、程なく、十五日に、かたき既に鎌倉に近づくよし聞えて、家々を毀ち、騒ぎののしる。世の既に滅するにやと覺えしとぞ、人はかたり侍りし。

〔一四〕 四郎左近大夫入道、軍にうち負けけるにや、隨ふ武士ども、殘りなく新田が方へ附きぬれば、(一)えさらぬ者どもばかり五六百騎にて、十六日の夜に入りて、鎌倉へ引き歸る。僅に中一日にて、かくなりぬる事、夢かとぞ覺えし。かくて、日々の軍にうち負けければ、同じき二十二日、高時以下腹切りてうせにけり。

〔一五〕 さて、都には、(一)伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて、事ども定められる。(二)二條の前の大臣召しありて參り給へり。こたみ内裏へ入らせ給ふべき儀、重祚などにてあるべけれども、璽の箱を御身にそへられたれば、只遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定められる。關白を置かるまじければ、二條の大臣、氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよし承る。天の下、只この(三)御はからひなるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。

〔一六〕 六月六日、東寺より、常の行幸のさまにて、内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし。去年の春いみじかりしはやと、思ひ出づるも、たとしへなく、今も、御供の武士ども、(一)ありしよりは、なほ幾重ともなくうち圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず、頼しくて、めでたき御まもりかなと覺ゆるも、うちつけめなるべし。世のならひ、時につけてう

(一)特別に深い緣故の者をいふ

(一)後醍醐帝還御

(二)道平

(三)道平公の一門親戚

(一)以前の遷幸の際よりは

つる心なれば、みなさぞあるらし。先陣は二條富小路の内裏につかせ給ひぬれど、後陣の兵は、猶東寺の門まで續きひかへたりしとぞ聞えしは、まことにやありけむ。正成も仕うまつれり。

〔一七〕 かの名和の又太郎は、伯耆守になりて、それも衛府のものどもにうち交りたる、珍らしく、さまかはりて、搖り滿ちたる世の氣色、「かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りけるにか」と、めでたきにつけても、猶前の世のみゆかし。車などたち續きたるさま、ありし御くだりにはこよなく勝れり。物見ける人の中に、

昔だにしづむうらみを、おきの海に、
波たちかへるいまぞかしこき。

昔の事など思ひ合するにやありけむ。金剛山なりし東の武士どもも、さながら頭を垂れて參りきほふさま、漢のはじめもかくやと見えたり。

(一)後醍醐帝の御宿緣
(二)前の隱岐への御下向
(三)後鳥羽院の御事
(四)漢の高祖が關中に入つた時、秦の將士の爭つて投降したこと

〔一八〕 禮成門院も、又中宮と聞えさす。六日の夜、やがて内裏へ入らせ給ふ。いにし年、御ぐしおろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々、殘りなく參りつどふ。十三日、大塔の法親王都に入り給ふ。この月比に、御ぐしおほして、えもいはず清らかなる男になり給へり。唐の赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にて渡り給へば、御供に、ゆゆしげなる武士どもうち圍みて、御門の御供なりしにも、ほとほと劣るまじかめり。速かに將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人々、ほどなくきほひ上るさま、枯れにし木草の、春にあへる心地す。その中に、季房の宰相入道のみぞ、預なりけるものの、情なき心ばへやありけむ、東のひしめきのまぎれに、失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言、母の尼上など、歎き盡せず、胸あかぬ心地してけり。

(一)尊雲法親王御還俗の後は護良親王と申す

〔一九〕四條中納言隆資といふも、頭おろしたりし、また髪おほしぬもとより塵を出づるにはあらず、かたきのために身を隱さむとて、かりそめに剃りしばかりなれば、今はた、更に眉をひらく時になりて、男になれらむ、何の憚かあらむとぞ、おなじ心なるどち、いひあはせける。天台座主にていませし法親王だに、かくおはしませば、まいてとぞ誰にかありけむ、その頃聞きし。

墨染の色をもかへつ、月くさの
うつればかはる花のころもに。

(一)俗男
(二)大塔宮尊雲法親王

要抄增鏡終

昭和十一年一月十三日印刷
昭和十一年一月十七日發行

要抄增鏡

▽定價金四十五錢△

編者　東京市淀橋區西大久保二丁目二三六番地　塚本哲三
發行者　東京市神田區錦町一丁目七番地　株式會社有朋堂代表者　三浦正
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　早坂善太郎
印刷所　東京市牛込區榎町七番地　大日本印刷株式會社榎町工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目七番地　株式會社有朋堂

終